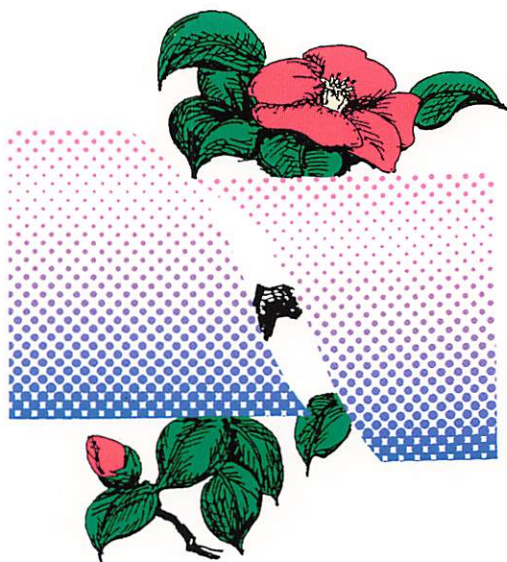


第七回 教文研教育シンポジウム記録

# 不登校をめぐる Part4

——学校の新しいあり方をさぐる——



神奈川県教育文化研究所



シンポジスト

・和田 重宏

(はじめ塾代表)

・宮島真希子

(神奈川新聞社記者)

・小島 康宏

(川崎市立東小倉小学校教諭)

・永田 實

(県教育文化研究所相談員)

コーディネーター

・菅 龍一

(児童文学作家)

1995年2月25日(土)  
於：小田原市民会館

## 開 会

○司会（榎本） 定刻になりました。受付の方は込んでいますが、これから始めたいと思います。

私は、教育文化研究所事務局長の榎本と申します。

まず初めに、主催者を代表しまして、神奈川県教育文化研究所の倉持所長よりあいさつをいたします。よろしく願います。

## あいさつ

○倉持巳佐男県教文研所長 皆様、こんにちは。

県教文研の所長をしております倉持でございます。

この際、教文研について若干触れさせていただきたいと思いますが、県教育文化研究所と言うと、行政の一つの機関と間違われる方もよくいらっしゃるので、あえて時間をちよつといただいて申し述べさせていただきます。

神奈川県教育文化研究所と申しますのは、一九八〇年の十一月に神教組によって設立をされました。組合員の主任手当から拠出金をいただいて、それで教育振興基金をつくっておりますが、その果実で運営をされている民間の教育研究機関でございます。



1980年5月28日 発行  
神奈川県教育文化研究所

九二年からこうした教育シンポジウムを始めてまいりまして、大体年二回、二月、十月に開催をしまいいりました。きょうは第七回目ですが、今まで六回行いました中身をかいつまんで申し上げますと、一つは、不登校問題が三回でございます。それから高校教育改革、あるいは高校入学選抜問題、これが三回でございます。不登校問題につきましては、第一回は相模原で行いましたが、「子どもの心を探りよりよい対応を考える」（一九九二年二月二十九日）というテーマでございました。第二回が「子どもたちの明日へのメッセージ」（一九九二年十月二十四日）というテーマで行いました。第三回が「進路と自立を拓く」（一九九四年二月十九日）というテーマで行ったわけでございます。いずれのシンポジウムにおきましても、学校、教師の対応、家庭、親の対応等をめぐって、その考え方や、実践例が数多く出されまして、非常に熱心な、活発な意見の交流がございました。

皆様もご承知のように、昨年の十一月末に愛知県で中学二年生のいじめ自殺事件が発生をしまして、以後、いじめ問題が全国的にクローズアップされてまいりました。テレビとか、新聞、週刊誌等々、連日のように、ちょっと過剰だと思われるような報道が続きました。文部省も急遽対策を協議したりして、協力会議からいじめに対する緊急提案、提言等が出されておりますし、国会審議の場でも論議をされました。これらのことは皆さんの記憶に新しいところだと思います。

いじめは、不登校と間接、直接にかなり深いつながりがあるわけでございまして、いじめ問題の適切な対処、解決ということが不登校に対処する上での一つの大きなポイントになっていることだと思います。

最近、この不登校については文部省も認めておりますように、親にとつて、あるいは教師にとつて「いい子である」という子どもも含めて、誰でもが、どの子どもも不登校になる可能性をはらんでいふということが言われております。この不登校については、その原因とか状況は非常に多岐多様であ

りまして、したがって、これに対する決め手、即効薬がない。こういうことも皆さんご承知のとおりでございます。

そして、最近では、不登校の子どもたちが居場所を学校以外のところに求めるといふ動きも強くなつてきております。言葉をかえて言うと、学校が楽しい場所ではない。学校へ行かないことに生きがいを見つけていく。こういう動きが出てきているわけでありまして、これらのことは少し根源的なことで申し上げると、子どもたちにとって学校が楽しくない、窮屈である。管理が厳しくて締めつけられる等々の、学校自体が不登校の原因をつくっているという問題に通ずるわけでありまして。

したがって、この不登校問題というものの対処を考えるときに、どうしても学校のあり方を問い直すといえますか、考え直す。教育課程から、あるいは子どもの自主的な学習権をどう保障するかとか、あるいは創造的な教育実践というものについて問い直す。少なくとも不登校の発生を少なくしていく。全然なくするというのはなかなか難しいと思いますけれども、減らしていくという方向で学校のあり方というものを考えていかなければならないのではないかと思います。そういう意味で、本日ここに掲げました「学校の新しいあり方をさぐる」というサブテーマも、そういう趣旨を込めておるわけでございます。

きょうは、各界といいますが、シンポジストの先生方のいろいろな立場からのご意見の発表があると思いますが、それらをもとにして、ぜひ皆さんで活発な意見の交流をしていただいて、一つでも、二つでもこのシンポジウムの中から持つて帰るものが得られれば幸いです。

シンポジウムの成功を心から期待をし、切望をいたしました。簡単ですが、あいさつにかえる次第であります。ありがとうございます。(拍手)

○司会 このシンポジウムは、西湘地区教育文化研究所、神奈川県高等学校教育会館教育研究所に共

催をいただいております。代表しまして、西湘地区教育文化研究所所長山崎幸與さんよりあいさつをいただきたいと思います。よろしくお願いします。



○山崎幸與西湘地区教文研所長 こんにちは。

本日は、県下各地から多数ご参加をいただきまして、ありがとうございます。地元西湘地区教文研を代表してごあいさつをしたいと思います。

本日のテーマであります不登校でありますけれども、西湘地区の教文研におきましても大きなテーマでありまして、この一二年に行いました講座の中でも、横浜市立大学の竹内直樹先生や、教育ジャーナリストの保坂展人さんをお呼びしたところ、多くの参加者があり、関心の高さや課題の大きさを改めて感じているところであります。

さて、数年前のことになりますけれども、本日のコーディネーターを務められます菅先生に「子どもの心が見えるとき」という演題で講演をいただきました。不登校そのもののテーマではありませんが、それにかかわる示唆に富む講演でありましたので、一言触れながら付随する話をさせていただきます。

菅先生は、子どもが発する求愛のサインをどのように読み取るか具体的な例を示されながら、「ぜひ子どもの心が見えるような先生やお母さん、お父さんになってください」というふうな結びました。私がそのとき思ったことは、日々行っている教育活動において子どもの心を読み取ることの難しさと、かつて経験した象徴的な出来事についてです。

その象徴的な出来事というのは、もう二〇年以上も前のことになりましたけれども、私が教育実習のためにある中学校にお世話になったときのことです。その中学校には一〇名ほどの実習生がお

りました。実習生はそれぞれ担任について指導を受けるわけですが、ある実習生が困った顔をしています。実習生の控え室でそのことがひとしきり話題になりました。聞けば、そのクラスにいわゆる問題生徒がいるということで、担任の話によれば、先生の話は聞かない。粗暴な振る舞いであり、勝手な言動をする。手がつけれないということでありました。

しかし、数日たったとき様相は一変していました。この問題生徒が実習生控え室の入口のところまで来まして、担当の実習生にくつたかない笑顔で語りかけていました。その実習生が後でしみじみと語った言葉は今でも忘れることができません。その言葉は、「彼が問題生徒ではなく、担任が心を開かないからだ」、そういう内容でありました。最近の実習生の意識がどうかわかりませんが、かなり大胆に、そして的確に表現した言葉だと今でも思っております。

さて、それから教員として二〇年を経過した自分を考えてみますと、大なり小なりプロ意識を持つようになっていきます。しかし、そのプロ意識が子どもの心を開かせたり、心を読み取るプロではないような気がしてなりません。そこに学校が抱える問題があるのではないかと思えます。

きょうのサブテーマは、今も言われましたように、「学校の新しいあり方をさぐる」となっていますけれども、昨年は懸案でありました「子どもの権利条約」が発効し、ことしは学校五日制が二回の段階に入る。そういうことになっております。「子どもの権利条約」や、学校五日制の理念に基づいた「学校の新しいあり方の追求」、そして「新しい学校の創造」、これらは我々に課せられた教育改革としての大きな課題であろうと思えます。

最後になりますけれども、本日の不登校をめぐる論議の中から教育そのものを問い直し、これからの教育改革に示唆を与えていただくことを期待してごあいさつとします。よろしく願います。(拍手)

○司会 時間が過ぎていって、シンポジウムが心配なんですけれども、事務連絡だけさせていただきます。

資料がいろいろ入っていると思います。教育相談のチラシ、「教文研だより」、「資料シリーズIV」。シンポジウムにご参会いただきましたので、参考までにお配りさせていただきました。ご活用いただければ幸いです。

それから、感想記入用紙と質問用紙が入っているかと思えます。質問用紙の方はシンポジストの話が終わりましたら、休み時間に回収させていただきます。それをもとに、質問を受けた先生方に答えていただくといい形をとりたいと思います。感想用紙は、シンポジウムが終わりましたら、お出しただきたいと思えます。

また、教文研で発行した不登校関係の冊子を持ってきております。必要な方は、お声をかけていただければと思います。

## シンポジウム

○司会 では、早速シンポジウムに入りたいと思えます。

コーディネーターの菅龍一先生を紹介いたします。先ほども話がありましたので、余り詳しい話はありませんけれども、『子どもの心が見えるとき』という本がこれです。後ろの方に置いておきます。また『子どもの愛し方』や『子どもが心を開くとき』など、も書かれております。講演も全国津々浦々で行っている菅先生です。児童文学作家という名前で皆さんにご紹介してありますけれども、和光大



学でも教えていると、そういう方があります。

それからシンポジストで、関治子先生とチラシにはなっていましたけれども、急に病気になりました。急遽川崎の小島康宏先生に交代していただきましたので、ご了承願いたいと思います。

では、菅先生、よろしく願います。



○菅（コーディネーター） 時間的にもおくれましたので、あと密度の高いシンポジウムにしたいと思います。早速本題に入っていきたいと思います。

まず最初に、四人のシンポジストの先生たちに一五分程度、不登校にどのような形で今までかわかってこられたか、そのことについてどんな考えを持っていらっしゃるか。あるいは新聞記者の方もいらっしゃいますから、取材の中で出会った子どもたち、そういうことを中心に一五分ずつぐらい話していただいて、その後、

先ほど司会者の方から連絡があったと思いますけれども、感想とか、質問とかの用紙が配られていると思いますので、それに四人のシンポジストに対する質問とか、もう少しこういふところが聞きたいということがありましたら、忌憚のない意見を書いて下さい。そのあとしばらく休憩をしまして、その質問用紙をお互いに読み合ったところで、第二部ということにして展開していきたいと思っております。大体四時半ぐらいをめどに終わりたいと思っております。

それでは、シンポジストの先生方を簡単に紹介します。

私の隣が和田重宏さん、はじめ塾代表です。そのお隣が宮島真希子さん、神奈川新聞社記者です。そのお隣が小島康宏さん、川崎市立東小倉小学校教諭です。そのお隣が永田實さん、教育文化研究所相談員。私も毎月一回会って一緒に仕事をしている、その仲間です。よろしく願います。

それではまず、はじめ塾代表の和田さんの方から。



○和田（はじめ塾代表） たいだいまご紹介いただきました和田でございます。

僕は、大学を出ましてから公立の中学・海老名市立海老名中学校へ数年勤めておりました。その後公立をやめまして、横浜にあります私立の橘学苑という、これは幼稚園から高校まである学校ですが、そこで、もうちょっと年齢差のある子どもたちと接したいということで、そちらに移りました。その後、現在やっております、これは寄宿塾と申しますが、寝食をともにしながら学び合う、そういう形の塾をしております。

国立教育研究所では、塾の分類というのが四項目ありまして、いわゆる進学塾と、落ちこぼれだとか、そういう分類があるんだそうですが、はじめ塾はどこにも該当しませんで、「特殊塾」という分類の中に入っております。

そういったことをやっているんですが、民間に出まして、日々感じていることを今日は主にお話しさせていただきます。ですから、当然のことながら学校現場にいらっしゃる先生方にはちょっと耳の痛いことも多々あるのではないかと思います、あくまでも私教育の立場から物を言わせてもらった方がいいのではないかと、そんなふうに思っております。

限られた時間ですので、かなり早口になるんじゃないかと思うんです。多分「おまえ、話をもうやめろ」って司会者から言われなさいといつまでもしゃべりそうですので、言っていたかどうかというのをまずお願いしておいてしゃべりたいと思います。

まず、不登校がなぜ起こったか。不登校が出現した意味というものをちゃんと考えなければいけないのではないかと、僕はそんなふうに思っているんです。これは何の意味もなくしてああいう現象が起こっているとは思えない。ところが、この教育の中での不登校という問題と、世の中一般の医療の

問題、公害の問題、農業の問題、さまざまな分野で行き詰まりを来している状況というのは非常に似て、そして時代的にも全く同じ時期に出てきている。これは何かを意味しているのではないかと、僕はそんなふうに思うんですね。ですから、この問題は教育だけでは解決しないのかもしれない。こういう視点を持たなければだめじゃないか、そうも思っております。

これは僕が今申し上げるまでもなく、教育の中で時代の流れというのは、不登校というものが文部省の中で調査され始めたのが昭和四〇年ごろですから、そのころには既に黄色の点滅、「注意しなさいよ」というような状態が起こってきたんだろうと思うんです。それから時が流れて、鹿川君の自殺の問題がありましたあのころになってきますと、かなり深刻な状況になっていました。つい最近の大河内君のいじめ自殺に至って、これはまさに赤に変わったかなと。信号もいよいよ赤かなと、そんな感じが僕はしております。いよいよ「これはもう後がないよ」という状況の中で、教育の問題を捉えなきゃならないだろう。そんなふうに感じております。

まず、初期の不登校の子どもたちの特徴と申しますのは、圧倒的に医者さんの子どもが多かったです。我々のところに来る不登校の子どもたちの八割は医者さんの子どものでした。なぜこれが医者だったのかというところは、言及しなくてはいけないかと思えますけども、それを言っている時間がありますので、その点ははしよって、その当僕らが感じていた問題点だけ言います。それは、幼児期の生活体験の空洞化だと、そんなことをそういう子どもたちと一緒に生活をしながら感じておりました。

それから、時代とともに不登校の内容が変わってきました。特に最近著しく変わったのは、文部省が不登校の原因の一部に学校もあるんだということを通達で出したことがあります。それによって随分変わりましたね。市民権を得たという感じがいたします。それまでの不登校を抱えた家族や不登校

児自身は針のむしろに座らされているような状況でして、大変つらい思いをしておりました。

ところが、文部省が通達を出した以後、子どもたちがかなり明るい顔をしていますね。どちらかというと、「行きたくないから、きょうは僕行かない」とか言って、自由に遊んでたりして、もちろん引きこもりのケースもたくさんありますけれども、以前から比べると明るい不登校児がふえてきた。そんな感じがいたします。

では、こういう問題をどういう視点でとらえたらいいのかと言うと。一つは急激な経済成長がもたらした点。もう一つは、これは多分ここにいらっしやる先生方には、「何を言うんだ」と言われるかもしれませんが、あえて申し上げますと、社会の「学校化現象」がもたらしているもの。この二点があるのではないかと感じております。

その急激な経済成長がもたらしたものは、まずマイホーム主義、いわゆる「核家族化」ですね。戦前の日本の社会では第一次産業といえますか、農業に従事する人たちの割合は大変多かったです。いわゆる大家族の自営業者が大変多かったです。それが経済成長とともにどんどんサラリーマンがふえてきました。「核家族化」が進んだわけです。この次に生じたのは「個室化」という問題。家屋構造がかなり変わってきました。子どもたちが一つ一つの部屋を持つようになってきました。最初のころは父親の書斎はなくても子ども部屋はあるというような状況でした。それがさらに進んで、今はどうかと言いますと、家族でありながら食事をみんなが違う物を違う時間にばらばらに食べるという「個室化の時代」になっております。これは経済の成長とともにあらわれてきた現象だなと、そんなふうに感じております。

もう一つの「学校化」ということは、一九七〇年頃だと思えますが、イワン・イリイチが「成熟した社会においては学校化と病院化と警察化が進む」と、こういう言葉を言っております。アメリカ

でも一九七〇年代初期にジョン・フォルトなんか「脱学校」ということで、盛んに学校外で学ぶシステムというものを考え出して実践してきました。もちろん日本でも「脱学校」的なものを試みた人たちはたくさんいるわけで、特に幼児教育における自主保育なんかは、かなりそういった「脱学校」的なものだったと思います。

八〇年代に入りまして、イギリスにありますサマーヒルのようなフリースクールの運動が起こってまいりました。いずれにしても、それは既存の学校教育に対しての批判なんです。それを民間がやろうという動きだったと思います。でも、残念ながら、いずれもこれは日の目を見ませんでした。これはそれによっていい結果を得たというような、そしてまた、今もそれが続いているという事は余りありません。これはとつても残念なことだと思います。

この原因は、僕なりに考えると、それらの活動がいわゆる学校教育に対立する形、又は学校教育を補完する意味でやった教育で、人間教育全般をやろうとしたのではなく一部分でしかなかったからだと思っっているんです。教育というものは、一部分を担ってもなかなかうまくいかない。そういう面があったと思います。

これは先ほど申し上げました、経済成長と全く歩調を合わせるような形になるんですが、家庭や地域社会に存在した独自の価値観が、徐々に学校という中で通用した価値観だけによって駆逐されてきた。昔は、僕が学んだ地域の小学校は田んぼの真ん中であつた、小田原の芦子小学校というところなんです。そこあたりですと、農家の占める割合が大変多いものですから、あの当時は子どもが幾ら勉強ができて、「百姓には学問は要らない」とかいう価値観がありましたね。それは多分かなり地域的な独自性というものもあつたんじゃないかと思うんです。

ところが、だんだん時代の移り変わりと同時に、そういうものが薄れてきて、成績がいい子どもは

上級学校へ進むんだという学校の中で通用する価値観が社会を駆逐していった。そういうプロセスを経てるように僕は感じます。

これは単純にいくわけじゃなくて、原因は非常に複合的にからみ合っていていくわけですが、学校化が進んだ結果どんなことが起こってきたのかといったら、教育産業ですね。いわゆる学習塾やら、予備校やら、家庭教材を売るような会社ですね。この教育産業が大変猛威を振るってきたわけです。これに対して学校は、それを退けるだけの力を持っていませんでした。勢いがなかったですね。のまれていった。そういう感じが僕にはいたします。

僕が教員をやっていた時代（昭和四〇年代）は、まだ多くの先生方は学習塾というものを否定なさっていましたね。「塾に行かなくてもいいよ。学校でちゃんと勉強をやっていればいいんだ」と、こういうことをかなりはつきり子どもや父母に伝えていた方たちが多かった。ところが、時代とともにだんだんそういう声は小さくなって、勢いもなくなってくるんです。そしてついに学習塾を黙認するようになってきましたね。今はどうかと言いますと、逆に「君、どこの塾に行っているの？」って先生から聞かれるんです。「成績が悪いじゃないの。どこか塾に行ったら？」というように、教育産業を追認する形になっている。そんな感じが今僕はいたします。

そして、経済の成長とともに一層教育産業がはびこって、その結果、子どもたちの成長に必要な根っここの部分が育っていない状態になっています。いわゆるいじくり回し過ぎですね。子どもたちをあつちの習い事に行かせる。こっちに行かせる。もう四六時中子どもたちは振り回されて、根っこを張る暇もない。そういう子どもたちですから、もちろん立派な枝を張って花を咲かせて実をならせるなんというとは非常に難しくなっています。子どもたちを見ていて、いわゆる根っここの部分の生活力のなさというものが非常に気になります。

我々は、子どもたちに対して「生活力」という言葉を使う場合には、「生活年齢にふさわしい実力」という言葉を使います。それを縮めて「生活力」と申しますが、いわゆる主体的に生きる力ですね。それが非常にない。我々はそのいうところにいち早く目をつけて、生活力の一番もとになるのは何なのかということをお突きとめていって実践をしているんです。これは時間があつたら詳しく申し上げる機会があるかもしれませんが今ではこれ以上言及致しません。生活力の欠如と関連があるのが基礎体力減退です。基礎体力が落ちてきたというのは、二〇年前に日体大の正木健雄さんという方が書いた本、「子どものからだが蝕まれている」という中で指摘されています。今では基礎体力ではないですね。基礎精神力ですら落ちていきます。高校生たちの通勤・通学の時間に駅のホームを見てください。中年の我々がちゃんと立っているのに子どもたちはいわゆる座りというやつですよ。立ってられないですものね。そういったような状況で、ちょっとつらいことはみんな避けて通っている。そんな感じがいたします。

そして、これは今日僕が一番言いたいところですが、ついに子どもたちの感じる力が非常に鈍ってきている。これを感じざるを得ません。我々のところでは、何も特殊な子どもたちが来ているわけはないんですが、この傾向が最近特に顕著です。

「はじめ塾」というのにもし関心がおありの方がありましたら、きょうお帰りのときに、受付のところにも多少パンフレットのようなものを置いておきますので、見てください。我々の活動は何をやっているかわかっていただけだと思います。山の中で異年令の子どもたちが同じ釜の飯を食う生活をするんです。薪でご飯を炊くんです。最近、目の前で薪をくべていて、かまの底を抜くほどまで炊いてしまふ事件が二つ続けたつたんです。目の前でですよ。鉄のかまの底が抜けてるんですよ。中身はもちろん真っ黒にこげますよ、においもしますよ、煙もですよ、ふたも燃えるんですよ。でも、まっ

たく気づかずに燃やすんです。

我々は、合宿所に百年以上も経っている古い農家を活用していますので、土間が広いんです。そこにはかの子どもたちもいっぱいいたんです。なのに全員が気づかなかったんです。ちょっと皆さん、想像できませんでしょう。でもそのぐらいのことは朝飯前で今の子どもたちはやります。だから、あの大河内君のようにないじめ自殺という問題が起こってくるんだろうと思うんです。

人の命が一人失われるぐらい困っているのに、悩んでいるのに、誰も気づかない。もちろん友だちも気づかない。担任も気づかない。毎日顔を合わせている親も気づかない。そこまで彼が苦しんでいるんだということを感じられない。そんな状態にみんながなっているんじゃないのかと僕は思います。

一昨年でしたから、アメリカで留学生が銃で撃たれて亡くなりました。この問題について、僕のような立場であんまりこういうことは言えないんですが、あえて申し上げると、あれによって息子さんや亡くした親御さんの悲しみはわかります。これは同情できます。そしてアメリカの銃社会の異常さもわかります。この二点は指摘されています。でも、教育実践者として見逃してはならない点の一つあります。言葉がわからなかったからといって、殺気という異常を感じられなかったんだらうか。皆さんこのことにちょっと注意をしていただきたいんです。これは人間が生きる一番根本的なことじゃないですか。言葉を知らなかったから何もできなかったということではないと思います。至近距離で「相手を殺すぞ」という気で銃を向けている。雰囲気で、そのいつもと違う異常な気配を感じない、感じられなかったという点、これは一体何なんだろうか。この鈍さが問題ですね。これは子どもを育てていかなければならない家庭や学校の人間が認識しなければならぬ点ではないでしょうか。

そういった鈍さ、感じる力が非常に鈍ってきている。そういう社会の状況の中で、実はこの不登校の問題というのは、彼らが本能的に自分の身を守るための行動、要するに「このままいたらたまた



んよ」「自分がなくなっちゃうよ」という、要するに生き残りのための行動じゃないかって、僕はそんなふうには思っています。今まで不登校の子どもたちとたくさんつき合っていて、つくづくそれは思います。でも、周りがみんな鈍くなっていますね。その子どもたちのデリケートな気持ちを感じられなくなっていますね。その辺が恐ろしいなと、思っています。持ち時間がきたようですよ、どうも。

○菅 ありがとうございます。

それでは、神奈川新聞社記者の宮島さん、よろしくお願いいたします。

○宮島（神奈川新聞社記者） こんにちは。

ここにいらっしゃる皆さんは、結婚されて、お子さんがいる方ですとか、あとは教職員の方というか、そういう方々ばかりで、私のように若輩者が何を言えるかという事柄も持っていないので、そういう意味でも外部ということを意識しながら話していきたいと思えます。



新聞記者をしています。会場にもかしらたら現役の学生さんがいらつしやるかもしれませんね。パネラーの中では学生に近い年齢だと思いますので、不登校とまでいかないんですけども、経験した友人との関わりと、あとは取材等で知った「いじめ」や不登校という問題を少し私なりの言葉で語れたらと思っています。

私は、中学、高校と私立の学校に行きました。中学受験はしたんですけども、高校受験という十三歳から十五歳という一番デリケートな年齢での受験競争というのはなかったんですね。学校の校則も、最近はくだらない校則は少なくなっているようですが、校則というのは余りなくて、制服はありませんけれども、自由な学校で、私にとっては結構楽しかったんです。中三のときにクラスが一緒に

なつたある友人がいます。その子が、月並みな言葉ですが、非常に感受性が豊かで、文章の表現もうまい。早熟なところがあつて、小説なんかは三島由紀夫から、あのころですと、萩原朔太郎とか、全部読んでしまうような子で、女子校だったんですけれども、あんなふうになりたいなと思うような子がいたわけなんです。

その子は楽器も弾けるし、いろんな面で私を非常に刺激してくれる友人であるんです。今でもそうなんです。その彼女が中三から高二ぐらいにかけて非常にそううつ的な、誰でもあのころは、社会に向ける顔と、自分の内面というのがバランスがとれなくなり、どうしたらいいかわからなくなって、言葉を失ってしまうことはよくあると思うんですけれども、やっぱりそういうことになつてしまい、朝はなかなか来ない。遅刻はするし、来ても「みんなと一緒にお弁当を食べるのが気持ち悪い」と言つて食べられないんですね。何とか来るんだけれども帰つてしまう。

私には、学校は授業は普通にあるし、先生もうるさいのはいるけど、首をすくめていけば何となくうまく過ごせていける場だったんだけれども、彼女によっては、何か自分がなくなつちゃうようで怖い。自分が自分であることを許してくれない感じがすごくして、誰もそんなことは言っていないんだけれども、学校に居ると何か気分が悪くなつてしまう。そして「そこに居られない」と言うんです。

「どうしてみんながそういうことに耐えられるのか私にはわからない」という手紙を何度か私もらつたりしました。そういう彼女自身もいらつてこちらに言葉を投げかけてくる。「何であなたはこんなことに耐えられるんだ」ということとか。完全に家に入ったまま来ないということではないですし、むしろ彼女のようないろんな才能ですとか、個性を持った子にはみんなは学校に来てもらいたいとか、もつと付き合いたい、知りたいという気持ちが強かつたんです。

いじめられていたわけではないんですが、彼女自身の中では、「学校」という場自体が何か自分が侵

される場という形で存在していて、それを誰も変えてあげることができない。彼女自身の考えですから、「それは違うよ。こういう良さもあるんだよ」と言っておけたとしても、彼女が感じてしまうことです。学校へ来たときには私たちはただそばにいて、かんしゃくを起こしたりとか、非常にいらついていたりとかしても、彼女には彼女なりの良さがあるし、居たら楽しいときもありますから、何となくいて帰っちゃうような時には、「じゃ、気をつけてね」と言ってお帰しちゃったりする。時には自分も帰ったりもしていたんですけれども。そういうふうには、学校に来たときには普通にといいか、彼女のことはみんな好きでしたから、楽しく過ごせるように、かんしゃくを起こしても、それは彼女の個性だから「またやっているね」ぐらいにちょっと言ってお、それで何となく一緒にいました。「気持ちが悪くなったら帰れば」と思っている。

これは、先生方から見たら、もつと助け合ったりしなくちゃいけないとか、「頑張れよ」と励ましてやらなくちゃいけないとか、そういうカンバリズムみたいなところが非常に希薄なように見えるかもしれないんですが、それは彼女の感受性を——これ以上私たち友人がそこまで入っていったら、もつと来なくなっちゃうし、それは私たちにとっても非常に喪失感の強いことだったので、「それはできないな」と、幼いながらもそういう感覚は持っていました。

今は結婚してしまって、「そんなことがあったね」なんて笑い合っているんですけども、本当にあの一時期は、何か自分の時間というものがない。行動ももちろん自由になりませんから、いろんなことを考えていても、学生であるという、学校に行く年齢であるというだけで、いろいろな制限があつて、それは保護をされるということと表裏一体なんですけれども、そういう意味で彼女の個性は非常に矛盾した存在というか、「こういうふうには生きたいんだけど、そういう生きる力がまだなくて」、生きる力というのは、自活できる力もないし、職業にもついていないし、「でも、

私はこういうふうに生きたいんだ」というのがあって、だから、今の生活とは絶対に違うと思ってるんだけれども、何もできないという葛藤が常に渦巻いていたような気がします。

友人は、完全な不登校ではないし、これは私の個人的な体験なので、全体に敷衍的に見ることはできないと思うんですが、不登校は昔言われていたように病気であるとか、おかしいことだとは全く思ったことがないんです。そういう人もいて当然だとは思ったことがないのです。悩んでいるお母様方、お父様方を見ると、私もきつと親になったら悩むのだろうと思うんですけれども、私が彼女と付き合い合った経験からいくと、何か一つ本当に自分の好きなことがあって、やりたいことがわかっているんだしたら、「そんなに気にすることないのにな」と常に思っています。もしかしたら、自分が家庭を持って、子どもを持ってそういうふうになったときには、裏切られる考えかもしれないんですが、まだ友人としてつき合った部分においては、そういう人がいて当たり前だとは思えないという個人的な体験がまずあります。

ちよつと自己紹介がおくれたんですけれども、私は今新聞社に勤めています、今度四月から八年目に入るところなんです。最初、川崎の支局で警察回りといいますが、事件事故の取材をしながら、皆さんの中でいろいろニュースになることを自分で掘り起こしていくことを仕事にしました。

川崎で不登校と関わりました。そのときは「登校拒否」という言葉だったんですけれども、中原区のI中だったんですかね。学校に来ようと思っても来られない子どもたちのための相談学級というか、学校にちよつと行って帰るといふ子どものことを取材したのが一番最初です。

もつといろいろ知るようになったのは、川崎市多摩区の中学校です。もう退職なされたんですけれども、英語の先生と出会ってからです。校舎の英語研究室の一角に漫画の本をたくさんそろえていて、「漫画部屋」というのをつくっていました。ご自身、手塚治虫が大好きで、手塚治虫の漫画を読

んでいると泣いてしまうような、私が出会ったところは五〇を過ぎていたんですが、非常に感激屋さんの先生で、「お年を取っているのにこんなに素直で、ふてぶてしい生徒とやっていけるのかな」というのが最初の印象だったんです。その方は本当に生涯一教師という感じの方で、とにかく居場所が学校にはないから、どういう子の居場所がないかというのと、「授業が全然わからなくて、何となく学校に来たい気持ちがあっても行けない子たちが、何となくぶらぶらする場所が全くなくて、学校というのは来たら授業を受けるしかないところだ」と言うんですね。

友だちにはちよつと会いたいけれど、授業がわからないから、どうしたらいいかわからない。本当は、授業もわかるようになりたいんだけど、誰も教えてくれる人はいない。だから、学校に来てもすぐクラスの後ろのドアから出て行っちゃう。げた箱あたりでぶらぶらしている子たちが、居る場所がないから常に取り締まりの対象になってしまって、かわいそうだなという気持ちがあったらしくて、ご自分の趣味と実益も兼ねて、英語研究室に漫画の本をすごくたくさん置いてあるんです。

今でこそ「個性化教育」という、括弧つきですけども、そういうことが言われて、いろいろな特色を出そうと、図書館に漫画を置くようになったり、公立図書館でも漫画を率先的に保存したりするような風潮になっていますが、そのころは孤立無援でその方は漫画を集めていて、居場所をつくってあげていた。それで、そういう生徒たちが結構来ては何か話をして帰っていく。からかわれたり、先生をからかったりしながらやっているという話を聞いて、何回か取材に行ったりしました。取材じゃなくても、ちよつとお話に行ったり、その後川崎を異動してからも、教育のことを取材するときには助けてもらったりした先生なんです。

そういう遊びの部分ですかね、授業か、それじゃなくちゃクラブ活動かと二つぐらいしか活動の選択肢がない学校という場所の中で、勉強できなきゃ部活ができればいい。部活ができなくても勉強が

できればいい。じゃ、それが両方できない生徒はどこに居場所があるのかというと、話を聞いていると余りないようなんですね。私もそういう人間だったから結構わかるんですけど、先生からもよく見えていない生徒、そういう人間はどこに自分のおもしろさを見つかるかというと、結構学校の外に楽しみを見つけたりとかするわけなんです。

そういう意味で、学校の中でも学校の外のような感じで、学校の中に学校の外を持つというか、そういうことでほっとできる場所をつくってあげているということが非常に印象的でした。案外そういうことは、きっと役所の一種である学校で、という言い方は非常に刺激的かもしれませんが、私はやっぱり役所に見えてしまうんです。「手続」とか、「そんなのは前例にない」という答えを取材先でいろいろされるものですから。そういう中では余りない試みで、私も高校を幾つか回ったり、中学に行っても、「個性化教室」とか言って、結構肝入りでつくられたいろんなフローリングの床の大きな部屋とか、そういうものはよく見ますけれども、本当に今までであった研究室の一角にそんな漫画が雑然と置かれていて、来たいときに来て見ていい。授業をサポートして来ているのに、「授業に行った方がいいと思うけど、つらかったらいなよ」みたいな形で先生が言っちゃうというような、そういう空間を持っているのは、私もまだあそこの中学校しか知らないですし、退職された先生が今どうなっているのか私もまだ確かめてはいないんですが、ああいう場所があつて子どもたちは幸せだったんじゃないかなと思います。

先ほど和田さんは、不登校はここ一二年の間に市民権を得た感じがするとおっしゃっていますが、私個人としては、悪いとかいいとかという善悪で判断できる問題ではないということと、本当にそういう人がいて、自分がその人が好きだったら寄り添って行って、何か話をしたかったらするし、それしか一緒に生きていく道はないんだというのが個人的な体験ですし、取材経験から言えば、学校に

絶対行かなくちゃいけないから、そういう場所を学校につくれと言っているわけではなくて、私の個人的に経験した不登校の友人のところから見ると、ふと自分に戻れる場所、例えば図書館の屋上とか、一人になってほっとできる場所とか、さつき和田さんの方から、いじくり回し過ぎという言葉が出ましたけれども、「誰にもいじられたくないよ」というところがあると思うんです。一人になりたいとか、そういう部分をもっと大切にできる場所がもつともつというところであればいいなど、取材しながらも思ったし、昔も思いました。それを何か不登校という形で自分の中に一生懸命居場所をつくっている姿が「不登校」という姿じゃないかなと、そういう方もいらつしやるのではないかと思います。

私は以上です。

○菅 ありがとうございます。

それでは、三人目で、川崎市立東小倉小学校の小島さん、よろしくお願いします。



○小島（川崎市立東小倉小教諭） こんにちは。

こういう席に上がることは初めてなものですから、大変緊張しております。川崎市内には、七つ区があるんですが、東小倉小学校は、川崎駅のある川崎区の隣の幸区というところにあります。駅でいきますと、「新川崎」という横須賀線の駅がありまして、そこから歩いて六分ぐらいでしょうか、今から十年前に学校ができました。現在、学校と住宅のある位置に工場がありました。それがいろいろな関係で移転をしまして更地になっていたんですが、そこへ大きな不動産会社が敷地を購入しましてマンションができました。約一、五〇〇世帯、六千数百人住んでいるんでしょうか、子どもたちの八〇パーセントはそのマンションから来ているわけです。あと二〇パーセントの子どもたちは、それに隣

接しています小倉地区というところから来ているわけなんです。

どんなふうに行ったら一番学校の雰囲気をつかっていたでしょうか。横浜市内にも、小田原の方にも新興住宅街として開発された高層マンション群のある場所があると思います。その中の子どもたちが私のところに通って来ているわけなんです。私は、その学校にはちょうど開校当時から在職しているものですから、十年目になるんですけれども、例えば宿題を出そうとしたんですね。そして「先生、やめてください」という親御さんがいました。それから「先生、宿題をだしてください。うちの子も望んでいますから」。三年生から四年生ぐらいになると塾通いが始まりまして、大体六年生で、受験をする子が五〇パーセント〜六〇パーセントぐらいおります。

かなり高いマンションです。値段も高いんですが、三〇階建てのが二棟ありまして、あと十五階建てでしょうか。子どもの数は全校で七〇〇人ぐらいで、五年生は四クラスです。私ぐらいの年齢の女性の先生と、二〇代後半の男性の先生と四人でやっております。

子どもたちのいろんな情報を交換しながらやっておりますが、職員室に帰ってきますと、大体の先生が「うーん」としかめ面をして帰ってきます。『実はこうこう、こういう子がこうで』という話が毎日のように聞かれるんですが、私はその話を聞いていて、常々先生たちと話をすると「もと」をどこに求めようかと、ずっと考えてきましたが、一つ、子どもに添うてみたらどうだろうかということ、今、先生たちと話をするとときにそういう発案をしながら、そういう姿勢でもって聞いたり、話をしたりしています。

といいますのは、私が新しいマンション群の中にある学校に赴任したときに四年生を持ったんですが、男の子で、今二〇歳かな、釣り舟の乗合船の船長さんになっているんですが、突然教室の中で暴れ出しちゃいまして、先生の言うことは全く聞かない。かわりの先生が来てもだめ。ちょっと暴れ出



すと刃物を持つようなこともあったりして、「どうしたんだろうな」と思いました。いきさつはいろいろあるんですが、お母さんとお話をしたり、お父さんとお話をしたり、お父さんと一杯飲みながら話もしたり、本人の気持ちのいいときは雑談のように話をしたりしながら、そんなことがずっと続き、いろいろな事情がわかってきました。家庭的なことですか、小さいときのこと、前の学校のことなどですね。

それはお話しすると時間がないので割愛しますが、たまたま彼が仲間と一緒に釣りに行くという話がありました。自転車で川崎港の近くにある釣り公園に出かけるという話でした。「ほう」と私も釣りが好きだったものですから、ちょっと首を突っ込みました。「先生もどうだろう」と言ってくる本人のために毎日毎日胃をキリキリさせているのですから、「釣りどころじゃないのにな。何考えているんだろう」と、こんなことを思いました、校長さんや教頭さんにも相談したら、「行ってみたらどうだい。出張旅費を出すよ」と言うんですね。出張旅費で釣りに行けるのかと、こう思いまして、とにかく一緒に出かけて行くことにしました。

四年生の三学期は、時々隣の教室に行つて全部かぎを閉めてバリエードを張つたりとかいうことをしていきまして、五年生の一学期はほとんど教室の中をうろろろしている状態でした。その間にも何回も彼から催促があつて、二、三度釣りに行きました。おじいちゃん、おばあちゃんに会つたり、それから五年生の後半ごろは一緒に風呂も入つたような記憶があるんですね。六年生の最後のときは、自分の席に座つて、ある教科については教科書を広げるところまでいきました。

私は何をしたかという、彼と釣りに行ったぐらいしかやっていないんですね。釣りの話だと何でも乗ってくるんです。ですから、釣りの話以外は彼とは話さない。「お父さんどう?」「お母さんと一緒に遊びに行っている」とかそういう話で、勉強の話は一切しなかつたんです。地元の中学校に行きま

したから、中学校の担任の先生に聞いたら、やっぱり釣りに行っていると云うんですね。「どうなのかなあ」と思っていました。それから彼自身はほかのところに住まいを変えてしまったものですから、お父さんに会いに行ったら、「先生、高校を途中でやめちゃって、釣り舟屋さんに住み込みで働き出した」と云うんですね。「へえ」てな話で、次に会ったら、「今度は船長さんの免許を取るために一生懸命勉強していますよ」と云うんです。その次聞いたときには、「船頭さんになったので、ぜひ遊びに来てください」というお話でした。

彼を私が担任しているときに、こちらが「こういうふうにしてほしい、ああいうふうにしてほしい、こういうことを教えたい」ということを顔に出したときに、すぐ拒絶反応を示す。だから、一層のこととそれをやめちゃうとおうと考えました。当然学校に来ないこともありました。ですから、不登校ということなんだろうと思うんですが、そういう姿勢をとるように考え始めまして、「子どもに添っていくにはどうしたらいいだろうか」ということをその辺りから考え出すようになりました。

私がか編み出したというよりも、彼にそういうことを教えてもらったということになるんだろうと思うんです。私は、学校の中で児童指導の担当とか、それこそ特別な任務を持ってやっているわけではありません。ただ、学校内の研修等でそういうことに触れたり、学んだりする機会はあるんですけども、二つ考えています。一つは、楽しい授業をつくらう。とにかく勉強は子どもにとっておもしろくなくちゃだめだ。もう一つは、授業とは別ですけれども、子どもに添うためにどんなことをしていったらいいんだろうか。その二つを考えながら今やっています。

ちょっと触れましたけれども、「児童指導」って漢字四文字でこっつい言い方なんですけど、子どもたちについての情報交換をしたり、それにかかわる研修などもしているんですが、ここ二年間ほどロールプレイで不登校的な子どもだとか、いじめている子、いじめられている子について勉強しましょう

ということで、何回か繰り返してやってきました。私の得意な役はいじめっ子なんです。三人から四人グループを組みまして、例えば私がいじめっ子だったら、例えば宮島さんはその話を聞く先生で、和田さんはその仲間という形でチームを組みましてやりとりをするんです。永田さんはスーパーバイザーという形で、そのやりとりの様子を見ている方なんです。校長さんや教頭さんがなることが多いんですが、私が一番得意なのはいじめっ子なんです。

宮島さんが「ちょっと先生のところにいらっしやい」と言って、そばに座るんですね。「何々ちゃんかね、こんなことを言ってきたんだけど」と私に言うわけです。「私、知らない」。その先生の役をやっている宮島さんは何とかその子をはじめていることを認めさせるために一生懸命質問してくるんですね。そのたんびに私はとぼけるわけです。そうすると、同僚の先生がいらいらしてくるんですね。仲間も私に口を合わせるようにして演じてくれるわけです。

そういうことを何回も繰り返していますと、年配の先生には大変失礼なかもしれないんですけども、年配の先生たちは、今言ったように、何とか説き伏せて仲直りさせるとか、いじめを認めさせようという方向に動くんですね。ところが、幸いなことに私は若い先生たちと一緒にやっています。彼らはどっちの役も実にうまくやるんです。本当になりきってやっています。その中で「俺はこういうふうに話をしたんだけど、実際やっていることと違う」、それをもとにして子どもとのかかわり方を考えていこうという発想でやっていく若い先生が増えてきた。それを職員会議の一番最初のところまで三〇分から四〇分時間をとって、情報交換とか、そういうことと同時にやっています。

その中で先ほどの釣りの好きな男の子の話じゃないんですが、その子に添う形でじっくり聞いてあげることが非常に大事なことであるということと、「うん、うん」とうなずきながらでも同調したり、時には言葉をはさんだりしながら、何かこちらが意図を持つとすぐ察知してしまって、彼自身が自分

のしていることですか、やっていることに對して自覚するチャンスがなくなっていくてしまう。時間をかけてやっていくと、彼らなりに糸口を見つけていく。そんなふうな気がしています。

それから、授業をおもしろくということなんですが、いろいろ工夫を挙げると、私自身が何々教科の研究の実践家で云々ということではないので、国語でも、算数でも、社会でも何か一つやっていると書いています。余りそのことで時間をとってしまうと申しわけないので、そんなような二つのことで子どもに添うということを考えながら日々過ごしています。

気になる子どもたちがたくさんいるんです。でも、一番怖いのは気になっていない子どもたちのことです。例えばやんちゃ坊主がいると、その子のことは気なりますけれども、ぱっと三人を見て、「この子はちょっとぐあいが悪いんじゃないかな」「この子はちょっとおかしいな、顔色が悪いな」というのをやっと思られるようになりました。でも、思い出してみると、「あれっ、あの子には最近一週間以上全然声をかけていないんじゃないかな。授業のときも発表もしていなかった？いや、名前は呼んだよな」とかということがあるんですね。

非常に激しいサインを送ってくる子もいます。じっとおとなしくしている子もいます。そういう私に気がついていない子の中に、「本当にこれでいいのかな」とか、自分に悩みを持っているような子どもたちがいるんじゃないかと、今もう一度顔をずうっと丁寧に、斜めに見て、前を見て、横を見てというふう丁寧にやらなきゃいけないなと思いつつ、子どもたちと暮らしています。長くなりました。

○菅 ありがとうございました。

それでは、最後のシンポジストで永田先生、教育文化研究所の教育相談員です。



○永田（県教文研相談員） 今の仕事に入る前はずっと横浜で中学校の教員をしておりました。そのうちの三分の二以上、だから、二〇何年前から学校に行かない子どもたち、不登校の子どもたちを集めて、いわば学級という形をとった仕事をずっとやってきました。

そういうことで、今回のシンポジウムは今までの回とちょっと違って、今まではそのような不登校のことを抱えたお母さんのご体験とか、本人自身の体験とか、そういうことも含めた話があったわけですが、今回は副題の意味を含めて、大人たちがそれぞれどういうふうなそのことを見たり、感じたりしているかということで、そういう話をきょうは試みているわけです。

私は、そういう不登校の子たちとの長いつき合いの中で割に初期のころに、ある女性から、中学校時代に三年間ほとんど登校しなかった。非常に苦しい思いをしてきたいろんな話をしてきました。決して面接とか、そういうようなことじゃなくて、いろんなところで、あるときにはご本人の家に行って、夜遅くまで話し込んだこともあるし、自分の体験からいろいろ振り返ってみたいということがあって、非常に感性もよく、そしてマナーとか、そういうのを心得て話していただくことも、あるときびゅつと言葉を詰めて、私は教師ですから、「教師風情に登校拒否の苦しみがわかってたまるか」ということを私にぶつけたことがあるわけです。

「風情」という言葉は今余り使われなにかと思いますけれども、これは「町人風情」とか、「役者風情」とか、こっち側で言えば、へりくだって言う言葉でしょうし、逆に言えば、相手に向かって言うときには、非常に見下げて言う言葉だろうかと思えますけれども、この言葉は私の大きな原点、出発点、となっています。これは教師が妙に物わかりよく「登校拒否がどう」とか、「不登校がどうこう」

とかということはいえない。これは親も同じかもしれません。あるいは心理相談員とか、精神科医とか、そういう人たちもそうかもしれません。「教師風情に登校拒否の苦しみがわかってたまるか」ということは、やっぱり肝に銘じておかなきゃいけないことなんだろうと一つ思っています。

きょうは、宮島さんが見えていて、私はマスコミテレビ、雑誌、新聞ということも含めて、そういう立場の方の話を聞きたいということは前から思っていたし、私は個人的には随分そういう機会を持っております。

私は自分の記憶の中で、新聞に出た記事なんですけれども、自分自身の中学校二年生か、三年生、私の年が解ってしまいますけれども、要するにそのころに、第二次大戦で日本が敗戦をして間もなくのころ、そのころは盛んに鉄道なんかのストライキ、労働組合のストライキは頻繁に行われたときだったんですが、非常に紙の事情も悪くて、新聞も小さな版しかなかったときですけれども、小さな記事が出まして、中学生が自殺をしたという記事だったんです。その記事の中に「鉄道のストのため、その子は学校に行けなくなって自殺をした」と書いてあって、私は直感的に「違う！少年はそんなことで自殺はしない」と思ったんです。これはマスコミ不信というよりも大人不信、「大人はそういう目で子どもの思い詰めた気持ちを見るのか」というのが、五〇年以上前のことですが、私の中に残っております。

実は、後になって、その子にはその子なりのいろんな事情があったということを釈明するようなことが記事か何かで後で載ったことがあるんですけども、「やっぱりそうだったよな」って。多分この記事は当時としては、労働者が、労働組合がストをやることはいけないことで、そういうことがそういう子どもを自殺に追いやったみたいな短絡的な書き方というか、紙面も少なかったかと思うし、調査もできなかっただろうと思うんですけども、こんなことは、子どもはどんなときに死を選ぶかと、

あるいは追いつめられるのかということについて、大人は何を見ているんだろうかということ、同じ世代の人間として大人不信という思いを自分の中に持ちました。

しかし、片方では教師になり、そして不登校の子どもたちとか、非行の子どもたちとかと接してきて、私自身もカウンセリングの勉強をしたり、そういうことをして、仲間の研修会の中で話題になったことが、今度は逆に教師が、あるいは教師以外のいろいろ、それこそカウンセラーとか、いろんなものがかわり語りかけても、なかなか子どもは自分の本心を語ることがない。それなのにある新聞記事の中で、非行少年がまさに初対面の、行きずりの新聞記者に自分の思いのたけをワーツと話していることが取材記事として紹介されているわけですね。

なぜ初対面で行きずりの人に子どもがそういうことを話せるんだろうか。これは逆に言ったら、毎日見えて、毎日つき合っている人間がその子を一番よく知っているとか、そして何でも話せるということとは違うんじゃないか。そこに何か別な肩書があったとき、その子とはどういう関係があるかということによって、子どもは誰に自分の本当の気持ちを告げるのかということをお願い知らされたことがあるわけです。

そういうことが私のその後の仕事の中でよくよく思い返されることなんですよけれども、じゃ、不登校の子たちの学級をやっていきながらどういうことをしてきたか。これは横浜にも相談指導学級というのがあります。小田原も相談指導教室、そういう子たちのたまり場になっているところがあります。これは今神奈川県下の各市や町にかなりの数できておりますけれども、そこではまず本当にさつき宮島さんが話してくださいったように、そこでいろいろ好きなことを自由にできるといことがかなり保障されている。無理にすることもない。ということ、ふだんの学校の教室の授業の形とは大分違うことをやっているんです。

だけど、子どもはただそこで好きように遊んでいることだけが、その子どもの求めていることなんだろう。か。その中で大分前のことですけれども、一つのエピソードを紹介したいと思うんです。

それは、山本有三という作家の「ウミヒコ ヤマヒコ」という劇作ですね。これが書かれたのは非常に古い、もう六〇―七〇年前になるんでしょかね。ただ、きょういらつしやる方々の中にも、中学校時代に国語の教科書にこれはしばらく教材として使われたことがあるので、それでお読みになった記憶があるかもしれません。

時には私が子どもたちに「何か読んでみようか」と言うと、「教科書なんかやだ」という子が多いんです。まずあの分厚さがどうしようもない。外国の教科書に比べればずっと薄いようですけれども、外国の教科書は参考書という扱いですから、何もあれを授業でこつこつやるなんていう気まじめなこととは外国ではしないと聞いております。ただ、休んでいる子たちにとつては、教科書を見たら「えっ、こんな量をやらなきゃいけないからできないよ」とかいうことがあるんですね。したがって、不登校の初めの時期に、かつては教科書を焼き捨てるということ、制服を焼き捨てるという子が結構おりました。それはもう自分が学校から無縁になるという宣言の強烈なアピールだったんです。

ですから、この教材でもやってみようかなということ、そのときにはその場所だけをコピーして、この「ウミヒコ ヤマヒコ」は、お兄さんのウミヒコが毎日に釣りに行く。弟のヤマヒコが山で狩りをする。だけど、ある日、道具を取りかえて行こうということ、出かけて行って、結局、ヤマヒコは釣りに行ったけども、大事な釣り針をなくしてしまう。そのことをお兄さんのウミヒコに言うことができない。これは二人だけのそういうやりとりがあるわけですけれども、その一部をちょっとこへ抜きました。(配布コピーを読む)

これを子どもたちと読み合ってみたわけです。「やだ、勉強するのかよ」とか、「かったるいじゃん」



とか言うけども、どっちみっち暇ですから(笑)、そう言いながら読み始めてみて、読み合って「どう?」と言ったら、「このヤマヒコ(弟)って、やなやつだよな。ちっとも正直じゃねえし、自分でやって釣り針なくしたのに謝りもしなきゃ、何かごちよごちよしてて、やなやつだよな」と言うんですね。A君という子が、たまたまその日休んでいるB君のことを名指しで、「これ、Bそっくりだぜ。あいつ根性悪いよな。これ見るとむかむかするぜ」と言うんですね。「そうかな」と言ったら、「そうだよ」といろいろ例を挙げて言うんですよ。「あいつ素直じゃねえよ」。これがB君が休んでいたときの一時間のことです。

何日かたつてこの続きをやってみようかということでもやりました。そしてちよつとやりとりして、「どうかな、この間そういう意見も出たけど」と言ったら、B君のことを言ったA君が、ちよつとその日緊張した感じだったんだけど、何か思い切ったようにして、「この前B君のことを言っちゃったけど、実は俺これ読んでどきつとしたんだ。まるで俺そっくりなんだよな」と言うんですよ。「まるで俺のことを書いているみたいだ。だけど、そういうことを言えないから、Bのことで言っちゃったけど、これ本当は俺のことなんだよ」と、こう言うわけです。

このときは「そうかな」ということで、その後少し話をしながら、もう一回、その次の三回目の時間のときに、「この間A君は、自分のことだと行ってたし、B君のことがそっくりだと行ってたけども、初めから自分のことをそういうふうに思っていた?いつからかそんなふう思うようになったんじゃないの」と聞いてみたら、「そう言われりゃ最初からそうじゃないよな」という話で、それぞれ一〇人ぐらいのメンバーが話を始めてみて、「自分もそうだけど、でも、考えてみると、小学校の何年生のころはそうじゃない。だから、学校を休むようになっちゃってからかなあ」とか、「その前からあったかもしれないけど」とか、いろんなことが出てきたわけです。

そこで確かめられたことは、初めからそうじゃなかった。何かいろんなことがあって、自分の気持ちが無くて素直になれなくなってしまったんだ。そういうあたりと学校を休む、多分そのあたりで言うと、何か自分というものの意識が目覚めてきたところに、そういうことを思うようになり、友だちや先生に言われたり、親に言われたりしたことの中から、自分のことをそういうふうに思うようになっていったのかなという思いがしました。

これはそういうことを見ると、私はその後についても、山本有三という人は何十年前に書きながら、やっぱりすごい作品を書いたと思いますけども、こういうたぐいの話をしていると、そういうところの中で少人数で話している中でぶつかってくることがあるわけです。子どもたちが小学校から、もしかししたら幼稚園から、そういうことを勉強の時間と呼んでいるところの中で、そういうことの話をしたり、漢字を覚えたとか、点数がどうだということではなくていくのなら、子どもたちの世界はもう少し違った体験をしたことになっていくんじゃないかな。

だから、仰々しく「学校を変える」とか、「教育を変える」とかいうことじゃなくて、小さな日常の中、その一つの例を小島先生は話してくださいましたけれども、そんなことがヒントになるんじゃないかと思っております。以上です。

○菅 ありがとうございます。

それでは、あと一時間ちよつとぐらいいしかありませんから、こういうふうに展開をしていきたいと思えます。

皆さんのお手元に質問の用紙が回っていると思いますので、申しわけないんですけども、その質問用紙の一番上のところに「シンポジスト何々さんにご質問します」と、できれば相手を指定していただいて、文章は余り長くなくて結構ですから、二、三行ぐらいで要点だけを書いていただく。それ

を回収しますので、あて先ごとにお預けしまして、それにとりあえず答えるという形で進めます。その後は今度はフロアから自由に質問をさせていただいて、少し盛り上がったところで終わりたいと考えております。申しわけありませんけれども、五分ぐらい休みますので、質問用紙に質問をしていたら、研究所の人たちが何人か中にいますから、それが集めて回ると思っていますので、渡していただくとありがたいと思います。

では、ちょっとお休みにさせていただきます。

## 討 議

○菅 それでは後半に入りたいと思います。ひとつよろしくお願いいたします。

いろいろご質問をいただきましたので、差し当たりそれにまず答えるという形で進めていって、一通り一回りしましたら、今度は会場の方からどんどん積極的な質問なり何なりをいただければ、それにまた答えていただくという形にしていきたいと思っております。よろしくお願ひします。

では、もう一回同じ順番でひとつお願ひしたいと思います。和田さん、よろしくお願ひします。

○和田 一番バッターというのは非常に不利な立場でして。

○菅 すみませんね。

○和田 後の方たちは様子を見ながら話ができますので、貧乏くじを引いたなと思えます。

幾つかご質問をいただいたのですけれども、「いわゆる不登校の問題で」というご質問に対してですが、実は、これは僕の非常に個人的なことなんです。先ほども申し上げたように、不登校の問題は

教育だけでは論じられないのではないかと僕は思っております。それと同時に専門性といいますが、各分野が余りにも細分化され過ぎて、その専門家のところに行けば何とかなるというイメージがありますね。問題解決にはそれが案外落とし穴になることがあります。というのは、我々は一個の生身の人間として生きていくわけですから、これは教育的な生活、これは生産的生活、これは遊びの生活なんて分けてやれないわけです。実際は全部つながって関連し合っているわけです。

ですから、僕自身不登校の専門家でもありませんし、そしていわゆる学習塾の専門家でもありません。僕はできるだけ「専門」という肩書を外して全体に関わりながら生きていきたいと思っている人間なんです。今の時代が要するに専門化、細分化し過ぎていて全体が見えにくくなっているから、だから、僕はあえてそうでないスタンスで物事にかかわりたい、そういうことがあるんです。

一番根っこにそういうものがあるものですから、不登校の問題で「親子分離」ということをお二方からいただきましたが、僕から言わせてもらうと、この問題についても余り分析的にならない方がいいんじゃないか。そんな簡単に割り切れないと思います。犯人探しをしてみても案外うまくいかないことって多いですよ。初期の段階では何にもわからない親は、「子どもが悪いんだ」という言い方をしがちですね。ところが、それで埒があかない。次に、今度は「専門家」と称せられるところに行く、「何か愛情が行き届いてなかったんじゃないの」「スキンシップの不足じゃないの」と言われて、今度はそれが母親の方に向かってきたりして、不登校児の母親はまじめなお母さんが多いから、まともにそれを受けて、「私の育て方がいけなかったのかしら」「あのときに子どもの前で夫婦喧嘩をしたのがいけなかったのかしら」とか言いながら自分を責めていく。そういうパターン。要するに犯人探しの構図に入ってしまったら。これがまずいんですね。

例えばこんながらがった糸をほぐしていくのに、固く結ばれたところを一生懸命時間をかけてとろう

としてもなかなかできませんよ。ところが、固くなった部分を手のひらに乗せてゆすっていると、いつの間にかほぐれることってありませんか。僕は案外この不登校の問題は全体的な問題だなと思っているんです。だから、僕のところでは、この問題は生活を共にすることによって解決しています。生活というのはあらゆる要素を含んでいるからです。友だちの関係など人間関係も含むし、寝る、食べるという生産的な問題も、遊びも、これは全部切り取ってバラバラにしては解決できないんですね。そういうところがかかわっていくと意外と効果があります。

そんなことでこの場合は、親子分離が原因ではないかということも、これはよく言われていることではありますけれども、僕はそこだけにこだわったらずいなど、そんなふうにも今までのかわりの中で感じております。

あとは、「学校化と病院化と警察化って何なんですか」ということなんです、大切な点ですが僕だけで時間を使ってしまうわけにはいきませんので、これはもし時間があつたらにしまし  
よう。

○菅 そうですね。

○宮島 私に対して一つあつたのは、今回のシンポジウムとはちよつと違うけれども、ちよつと関係あるというか、いじめの



ことなんです。が、「マスコミ」としてはじめ報道に対してフォロワーがあるかどうか聞きたいということでした。私個人に対してなのかちょっとよくわからないんですが、「マスコミとして」というふうにくられてしまいますと、「マスコミさん」という人はどうかわからないんですが、マスコミという新聞社の組織はありますけれども、学校の先生等と同じように、私たちも「学校」ということで一つに見ちゃうと思うんです。それぞれ人によって関心の持ち方、あるいは何を取材したらいいのか、悪いのか、何を今取材すべきか、何を優先してやるべきかというのは個人にかなり任されている部分があります。それで「マスコミとして」というのは、「新聞社の組織として」と解しますと、組織として何を優先させていくかという問題については、私は、教育の問題は重要だと思いますが、政治とか、経済とかに流されていってしまつて、新聞社も非常に男性社会ですから、政治とか、経済の方が格が上とかいうか、そんな扱いを受けていて、教育とか、暮らしとか、生活とか、そういうものは昔の「ブン屋」とか言われていた人たちしてみれば、多分きつと奥さんたちに全部任せっきりであつて、そんなものはなかなか視野に入つてこなかった世界で、ようやく最近、新聞社の組織としても目覚めてきていて、暮らしとか、性の問題とか、医療の問題、福祉の問題というものに、これは世の中の流れと一致すると思うんですが、非常に男性中心で、政治、経済が第一義的に重要なテーマであつて、それを追いかけているのが一番いいんだみたいなところがまだどこかに残っている。

「マスコミ」という組織の中では、はじめの報道を息長くやっていく記者というものを大切にしてくれるかどうかというのはよくわからないんですけども、私個人としては、これからもやっていきたいテーマの一つです。それで一つ一つの私のやってきたことを振り返ったり、あるいは同業他社の記者といじめの報道に対して取材した経験等を話し合うときに、いつも「ここを聞けばよかった」「あそこをもっと深くすればよかった。もしかしたらそれをしなかったことによつて傷ついた人がいるかも

「しれない」ということを思うと、いつも完全なものではなかったなと思うしかなくて、そういう意味においては、非常に不完全ながらやってきたわけなんです。しかし、それだからといって、やめてしまおうというのではなくて、かたい言い方ですけれども、人間が幸せじゃない状態にずっといるというのはあり得てはならないことだと思っっていますし、それはいじめている側ももちろん幸せだとは言えないと思っすけれども、その全体というのは常に見ていきたいと思っっています。

だから、「マスコミとして」という大きなくり方をされると、それはどうかわかりませんが、個々の記者、私だけでもなく、同じ業界にいる記者たちの中では、本当に熱心にこれを追いかけている記者がいらっしゃいますし、そういう方たちの力は信じていますので、私もそういう人たちに刺激を受けながら、あるいは取材しながら、その時々後は後ろから見れば不完全かもしれないけれども、ウォッチをしていくべき対象だとは思っっています。それしか今は言えない状態です。

○菅 小島さん、ひとつよろしく。

○小島 たくさん来なければいいなと思っっていたんです。永田先生のところが一番多いので安心しました。

「お答えを」と言われても非常に困っってしまうんですが、ロールプレイのことについて二つばかりありましたので、私自身が今どういうふうに感じているかということをお話させていただきます。

一つは、職員会議の一番最初、三〇分間から四〇分間、長いときは一時間ぐらいになるときがありますけれども、ほかの議題に優先させてそういう場をつくっているわけです。

先ほども申し上げましたように、ある事例について、例えばA子、B子、C子という三人の女の子がいて、A子がちょっと強い子で、B子はそれにくっついていてる子で、C子は、今まで仲がよかった

んだけれども、有形無形のいじめを受けている。C子はいろんな理由をつけながら学校に来なくなっ  
てしまいましたという簡単な条件設定で、先ほど申し上げましたように、A子、B子、C子、先生、  
スーパースパイザー（それを見守る方）、そういう設定でやるんです。

それで、いろんな条件をたくさんつけてしまいますと、錯綜してきてしまいますので、A子になっ  
た私はいじめっ子だとしますと、そうすると、例えばお母さんからいつもお小遣いをもらっていない  
とか、自分なりに考えたA子の状況を設定しながら、問い詰めてくる先生に答えを出さず。C子  
をいじめなければいけなかった原因とかは、私自身はそれを知らなくていいわけです。そういう形で  
一つの即興劇をつくっていくんですね。

そうすると、自分がその劇中の人間の中に入っていくことによって、そのA子が思っていたことや、  
隠さなきゃいけないような理由について、自分で演じながら、もしかすると私が演じたことは、A子  
のこの部分に一致するのかもしれないとか、例えば永田先生が先生役をやっているとしたら、全然関  
係のない話をした方が乗ってくる場合があることに気がついたりということを、演じた後に報告をす  
るんですね。

そのA子とB子とC子の関係を改善しようとか、そういうことが究極的な目標じゃないように思っ  
ているんです。先ほど申し上げましたように、先生が割合何か問い詰めて改善したり、解決したり、  
原因を追求しようという姿勢に出るのは、今までのロールプレイの中で大方の先生役をやっている先  
生がほとんどそういう傾向にあったんです。そういうのを見てくると、自分自身もやっぱりそうだっ  
たらう。早い話がうまくいっていない場合が多いということが報告されたときに、そういう先生のか  
わり方はいいんだろうかという疑問が生まれてきたわけです。

最近、私たちの学校では、先生が子どもたちにいじめをしているのではないかという話がぼつぼつ



上がってきまして、何げない言葉がけだとか、名前の呼び方ですとか、そういうことが子どもたちの心の中に、例えば中学校あたりだと、かなりポンと返ってくる場合があるのかな。高校だったらもつとなのかと思ったりするんですが、小学校の子どもというのは、小さければ小さいほどそのままのみにしてくるんですね。だから、先生の言葉がけ一つが心の底にずっと残っていて、だんだん自分自身気がついてきたときに、それが思いもかけないことではね返ってくるような事例が幾つも紹介されるんです。

ですから、ロールプレイをしながら子どもになったり、先生になったり、それを第三者で見る立場になると、自分自身が子どもとのかかわりをなりわいに行っているにもかかわらず、そういう基本的な子どもを理解するための条件を余り感覚的に学んできてなかったなという反省もできるわけです。だから、そういうことを何回も通すと、緊張感が抜けたり、「恥ずかしいや」とかいうことが抜けて、私自身は自分の意識改革、「改革」なんて言うとおかしいんですけども、意識自体が少しずつ変えられてきているという気持ちです。

ロールプレイは専門の方がいろいろ書かれていますので、例えば指導がうまくいかないか、いくかというところよりも、そういう練習なり、訓練を通して子どもの方というか、子どもの見え方というか、子どもに添っていく、近づいていこうとする営みなんじゃないかなと私自身感じています。

だから、ロールプレイをやったから、指導がうまくいかないケースについて、すぐうまく当てはまるというものではないような気がするんですね。だから、余り直接的に問題のケースをそのままパツと当てはめてやってもいけないのじゃないかなという気がします。

それから、子どもとのかかわりについてのことなんですが、私はとにかく子どもの顔をよく見ようということをお心にかけて朝教室に入っていきます。「おはよう！」と言ってドアをあけていくんですが、

みんな黙っているんですね。毎日毎日「おはよう！」「おはよう！」って朝入っていくんですが、ようやく何人かからぼつりぼつりと「おはよう」と返ってくるようになりました。同じようなことを思い悩んでいる三二、三歳の先生が、「先生、やつとみんな声を出して返事が返ってきました」と言うんです。そのとおり彼が教室に「おはよう！」と入っていくと、元氣よく「おはよう！」って返ってくるんですね。私のところはまだ返ってこないんです。学年は一つ違うんだけど、やっぱり私の接し方が冷たいのかなと、子どものところに行く前にそんなふうに感じながらやっているんです。例えば給食のとき、フリーになったとき、私は子どもが出してくる声は「うそじゃないかな」と思うこともあるけれども、全部本音だと思ってとらえるようにしています。本音が聞きたい、本音が聞きたい、こう思うんですが、それだったらまるごと本音でいいや、全部聞こうという姿勢で聞いています。

それから、公立学校の限界について触れている方がおられるんですが、「同じ」姿勢でいくとすると、限界や問題点、改善点、いろいろなあるんだろうけれども、「いろんな形」で子どもを理解していく、子どもに添うていこうとと考えています。限界もあるんだろうと思っっているんですが、それこそ子どもと接して、一番最初にお話をした子どもの場合三年間のつき合いだったわけですが、それ以後もあります、何か短い時間で効果が上がるとか、成果が上がるとかいう、子どもと対しているときにはそういうものじゃないような気がするんです。

ただ、先生たち同士がごく普通の会話として、例えば職員室の中で子どもの悪口を言わない、でも、出ますよね。「あの子は、この子は」と出るんですね。それを「ちょっと待ってよ」とか言いながら、本当にひどい悪口になっちゃうときもあるんですね。だけでも、そういうふうにはしないようにしよう。互いに悪口を言わないようにしようと言いながら、子どもの話をするんです。そうすると、だんだん先生自身が子どもと同じように自分をさらけ出してきて、自分がやっていたことの問題点みたいなもの

に自分自身が気がついてくる。だから、これはできれば勤務時間の中でやっていきたいけれども、そうじゃなくて、そういう話になると夜つびて九時、一〇時になることはざらにあります。

だけど、何かそういうことで自分の苦しみだとか、そういうものを理解してもらったときに、「あつ、あの先生は俺のこの部分を聞いてくれたし、ああいうふうにやったらほめてくれたな」と思うと、何かすつとするんですね。そしてまた次の日来る。だから、そういう研修をしようとして、一〇年間かかったんですけれども、少しずつそんなことを試みていかれるといいのかなと思ったりしています。すべてにお答えできなくてすみませんが。

○菅 では、永田先生、ひとつ。

○永田 具体的には一つ、上のお嬢さんも中学生ですけれども、不登校で、下のお嬢さんにもそういう影響がないか。これからはどうか心配だという大変に切実な質問があるわけですけれども、さつきずつとお話のあったことの中で、これはなかなかご納得がいかないだろうと思いますけれども、よく不登校にならないための予防とか、何かないかという質問とかがあるんですけれども、そういうものはない。ないというよりも、例えば花粉症の予防法とか、インフルエンザの予防法とかあって、そういう薬も売っていますけれども、それをやったら大丈夫なんていうものは何もないんですね。やっぱり人間の当然な、自然な姿として、不登校は必要だからなるんですね。まねをしたりなんかしてなるものじゃないんです。

不登校になることで、上のお子さんがなれば下のお子さんになるとは限りません。なる場合もあるし、ならない場合もありますけれども、そこに何か訴えているものがあるんです。ただ、下のお子さんの場合に、間々私が体験してきたことと言えば、「本当は休みたいんだけど、私も休んじゃったら、

お父さんやお母さんが心配するだろう」みたいなことで頑張っちゃうために、あるところでエネルギーが果ててしまうことが時々あります。

これは前にも菅先生が自分の教え子のことで言われて、ご本人が話してくれたんですけども、学校を休んでしまった子たちは何が一番苦しいかといったら、自分のことで親が心配することが一番つらい。だから、そのことがあつげらかんと、というふうにはいかないですけれども、あえて言うならば、義務教育の間堂々と休んでください。高校から先のことについては、これはたくさん選択の道がありますから。そこまで腹を据えたときに子どもは自分なりのペースでそういうことをしていくんだろうと思います。

そのほかのご質問については、先生の方から子どもにどうかかわつたらいいんだろうか、具体的なことで話してほしいということがあるんですけども、これは教師も親もそうだと思います。こういう式を書いたときに自分の中にどういふ答えが出てくるか。

まず、「私」マイナス「教師」、あるいは「私」マイナス「親」イコール、答えは何でしょう？「私」の中から「教師」とか、「親」とかというのをとっちゃったときにそこに何が残りますか。ゼロだったら大変ですよ。そこに何かアルファが残るわけです。子どもたちが探し求めているのは、それに触れたいことなんです。

だから、先生が家庭訪問をしたりなんかするときに、大体は学校の「お知らせ」とか、いろんなものを持って行かれることが多いわけです。それはだめとは言いません。だけど、子どもに無理に会うこともありません。やっぱり家に行つたら、お母さんならお母さんとお話をして、そのときに何を話するかといったら、具体的に言えば、どれだけ教師が雑談ができるか。「休んでいるとこうなりま

す」とか、「学級の方はこうです」とか、よく言うことは「みんなが待っていますから」と言うんです

けれども、その子にとっては「みんな」はどうでもいいと言ったら失礼ですけれども、「私のことを先生はどう思ってくれているか」が問題で、みんながどうかということはその次なんです。「先生は私のために来てくれていて」、「私」マイナス「教師」という、「私」マイナス「親」という、二人の人間がそこでお茶でも飲みながら二〇〇三〇分話をしてる。「私の中学のころはこうじゃなかったですよ」とか、「お母さんのときはどうでしたか」とか、「何を読んでいた」とかどうとか、「このおせんべい、おいしいですね」とかね。そういうことを子どもはふすまの陰から、トイレの陰からちゃんと聞いています。そのぬくもりが子どもの求めているものなんです。

不登校の子たちに聞いてみると、幼稚園や小学校のときから先生とそういう出合いがなかったという子が多いです。あるいは逆に言えば、そういう出合いがあった子は立ち直る機会が多いですね。その辺は技法じゃないと思います。そういうことも含めて、今度の大河内君の出来事を通してながら、私が痛烈に思っていることは、親と教師、親同士あるいは教師同士、そして親と子どもの中にいろんなギャップがあります。それを少なくともきょうは大人が集まっ



ているところなんですから、きょうのシンポジウムの意味は、そこでどうやって近寄って話を詰めていけるだろうか。「もうあの親はだめだ」とか、「うちの先生、だめなのよね」とかいう話は、私どもの電話相談に毎日のように入ってまいります。だけど、いつも私たちが答えるのは、「だけど、そこでもう一つ歩み寄って話すことができないだろうか」ということではないいろいろな相談をするわけです。

それはさっき言った、「私」マイナス何かというところのプラスアルファのことをつないでいくことだと思っております。そういった点である先生から、受験体制の中で成績のいい子が中心になっていることに対して、勉強のことよりもっと人間的なすばらしいものを持っている子と、そういうことが認められる社会はできないだろうかとの問いが来ていますが、それが今申し上げたように、職場の中で、あるいは親と親、親と教師の間でもう一步お互いが歩み寄った関係ができないだろうかという感じるわけです。

有名なたとえ話で、ドイツにある話ですけれども、寒い冬の中で、ハリネズミがふぶきの中で過すときに、近寄り過ぎるとトゲでチクチクとなるわけです。離れちゃうと体温が伝わらないわけですね。ジクツと来たり、離れたりしている中で、ハリネズミだって体温を感じながら、トゲで刺さらない、そういうぬくもり方ができるはず。大変抽象的なことを言っておりますけれども、そういうことを私たちの中で実験してみましよう。やってみてどうなるかということね。考えてないで実験してみることだと思います。

一点、これは不登校というよりも、学校の場の中で、本人は悪気がなくてやっているだけけれども、どうしても問題になってしまう行動が起こる小学校一年生のお子さんのことで、担任の先生から切実な質問が出ておりますけれども、これをどうやってわかってもらえたらいいか、この子のことをわかってもらえたらいいかと、とかく誤解が起こりますけれども、このお子さんは若干の障害を持って

いるお子さんなんですけれども、それを見ている専門家の方、もし見ていられていなかったら専門家を紹介して、その方のアドバイスを得ながら、今やそのことを恐れないできちっと親たちに学級懇談のところでもまず話をしていただく。この話し方は難しいと思います。もう一回言いますが、はじめのことを含めて、今そういう場を学校の中に何とかしてつくらなければならぬ時が来ています。だから、大人がどうやって裸になって話ができるかということとをせひやらなければならぬんじゃないかなと思っています。

もう一点、「以前は『登校拒否』と言っていたのが、どうして『不登校』というふうに呼び方が変わったのか」とか、「不登校のことを『心の病気』と言ってはいけないのか」というご質問がありますけれども、このことを言うときとちよつと長くなるんですけども、学校に行かない状態のことを言っているわけで、これはいろんな意味があるんです。国際的に、以前は「登校拒否」という言い方がアメリカとか、イギリスとか含めて使われてきました。そういうところのことを含めて世界的にとらえ直しが起こってきていました。

やっぱ「学校に行っていない」という事実、現状ということに対して、そのままをどういうふうに受け入れるかということとです。その前のところでは親子の分離不安だとか、説明の仕方がいろいろあったわけです。あるいはきょう出たように、学校に原因があるじゃないかとか、いろんな要素がわかってきました。そうすると、従来の「登校拒否」ととらえていたのは、こんな親の傾向があるとか、子どもにこういう性格があるとかみたいなことを言ったんだけれども、そういうことを見直して、行っていないという事実から出発して考え直していこうということだと。これは専門家が言うとき、もう少し言い方が違います、私はそういうふうにとつてもらいたい。それから『心の病気』という問題は、現在のところではまだ『精神障害』というとらえ方とイコールにとつてしまうことがあるわけで

す。『精神障害』に対してそういう偏見を持つこと自体が問題なんですけれども、学校の先生の方から勧められて「精神科に行きなさい」ということがあったり、大河内君をめぐっても、ちょっとそれに似たようなことがあったりしています。だから、そのあたりでは、もし『心の病氣』ということを使うのなら、病氣だったら休むのが当たり前、休養が必要。幾らでもゆっくりと休むことだということですね。そういう意味です。

○菅 ありがとうございます。

実は、和田さんがこの後別の会合があつて、もう間もなく退席なさりたいというので、和田さんに特別に聞きたいという方はいらつしやいますか。手を挙げて聞いていただきたいと思ひます。いらつしやいませんか、それでは何か一言、……。

○和田 大変申しわけないんですが、これで失礼しなくてはいけないものですから。

最後にちよつと一言だけ申し上げたいのは、いじめの問題でどうしてあれほどまでに学校が世間からたたかれなければいけないのか。マスコミからの集中攻撃を食ひ、批判にさらされるわけです。何であれほどまでに。僕もかつて身を置いたところですから、とつても同情するんですね。これに対して僕の友人が、国研にいる結城忠さんという主任なんです、彼が「学校教育における親の権利」という本を出しています。海鳴社というところから出ているんですが、実は、これは日本の教育の制度が他国と全然違ふところに根差しているんだということを言っているんです。僕は不觉にも教育の畑にいなながらこれは知りませんでした。

これは憲法九条に等しいぐらい他国と違ふんだそうです。これだけは披露しておかなければいけないと思ひますので、それだけ申し上げて帰ろうと思ひます。それはほかの国々は、子どもの教育は親に義務と責任があると言っているんだそうです。ところが、日本の法律では、ご存知のように、子



どもを育てるために就学義務がある。要するに学校に入れなければならない。こういう規定がある。ですから、他国においては子どもへの教育に対して学校は責任ないんです。親に責任がある。ところが、日本の法律では学校に入れなきゃいけない。だから、当然学校は子どもを教育して幸せにしてくれるところなんだ。そういうふうな考え方が学制がしかれて一二〇何年の間に我々の中にしみ込んでいるんです。だから、もしかしたらこういうことについても今見直さなければならぬ時期かなと思います。当然のことながら最終的には親の責任というところに来るわけですから、日本も教育の責任と、義務ということについて考え直さなければならぬ時にきているんじゃないかなと思います。

ですから、一二〇年たった後の学校教育の功だけじゃなくて、罪の部分についても論じなければいけない時期に来ているんだらうと、僕はそんなふうに感じております。不登校の問題、はじめの問題については各論では、我々は毎日子どもたちとかかわっていますので、申し上げたいことはたくさんあるんですが、大変申しわけありませんが、きょうのところはこれで失礼致します。どうもありがとうございます。(拍手)

○菅 ご苦労さまでした。

それでは残り時間二〇分かちよつとぐらいいすけれども、フロアから自由に発言をさせていただいて、特定の方を名指しして質問していただいてもいいし、そうでなくても構いません。活発なご質問、ご意見を言っていたたくのも結構です。シンポジストの発言を批判していただいても構いませんから、そういう趣旨のご意見があればご自由にご発言ください。どうぞ。

○—— 先ほどマスコミのフォローを質問した者なんですけども、うまく書けなくて、また、今うまく言えるかどうかかわからないんですけど、私の気持ちの変化なんかも含めて、ちょっとお話ししたいと思うんです。

以前ああいう報道があると、マスクミ報道に対して非常に拒絶感がありました、そういうのが正直ありました。ちよつといろんなことがありまして、いろんなことというか、私は中学校で養護教諭をやっているんですけども、子どもたちとかかわりを通じて変わっていったといいますが、感じ方が変わっていったということで、大河内君のことで、私は横浜なんですけれども、横浜の学校ではじめについてのアンケートを全部とりました。そのフォローをどうするかというのは、また問題なんですけれども、少なくとも私の学校ではいい刺激と言ったら変ですが、あつたと思ってるんですね。それはそれですべてが解決するなんて全然思っていないんですけれども、ただ、やっぱり思ったと思つたことや、思っている人たちが私も含めてですけどもいると思いますし、それからいじめられた経験のある子どもたちにとつても、何らかのサポートになつたところもあつたと思いますし、私の学校では校長がかなり力を入れたと言ってます。

ただ、ただと言つたと変ですが、その後立て続けに自殺の報道がありましたよね。そのことに関して報道が、もちろんマスクミが、それがいけないなんて言うつもりはないんですけども、そういうことを抱えている子どもたちが学校にたくさんいたんだろうから、ああいうふうに立て続けに自殺が起きたわけで、その報道によって共感したといえますかね、子どもがそういう心境になつたことはあつたんじやないかという気がします。そこでももちろん思いとどまってる子もいると思うんですけども、やっぱりつらくて、そうなつた。今回そういう該当者がいたかどうかわかりませんが、そういう感じで、逆に共感してほつとした子ももちろんいると思います。「つらいのは自分だけじゃないんだ」という子もいたと思いますけれども、そういうふうな踏み込んでしまつた子もいるかもしれない。あるいは今後いるかもしれないということで、そういう感想を持っているんですね。

私も何人かの子と少人数で話をすると、中学二年生の男の子が多かつたと思うんですけども、「すこ



くつらいんだ」「つらい時期なんだ」ということが伝わって  
きました。

何を言いたいかというと、そういう意味ですごく影響力  
が大きいということなんです。それで、男の子何人かと話  
していて、年が明けて阪神大地震になりましたら、「先生、  
はじめの報道はどこかにいっちゃったね」という話があっ  
て、先ほどから学校というのはいろんな、私自身もそうい  
う意味では今までは学校のことは中だけでみたいな、どこ  
か気負いがあったんですけども、力になってくれるところ  
、助けてくれるところは全部のところとやっていこう。  
子どもたちの居場所も含めて学校だけではないというよう  
な、最近はそのような感じで接しているんです。

そうすると、マスコミのそういう報道も子どもの居場所  
の一つになっていくということもあるだろうと思うんです  
ね。そういう意味でフォローについてどう考えていくのか  
あるいは今後そういうことについて、考えていらつしやる  
のかもしれませんが、考えていって、より一層心にとめて  
おいていただきたいなというつもりで質問を書きました。

○宮島 どうもありがとうございます。

いろんなマスコミのいじめの報道については、非常にワ

イドショー的にセンセーショナルにとらえて、「かわいそうだった、かわいそうだった」という報道がテレビはかなり多かったですし、あとはいろんな手記が報じられたこともあって、それで同情が非常に集まって、ああいう同情をしてもらえるんだったら「僕も」という形で思ってしまうお子さんがいても、もしかしたら不思議じゃないですし、私も余りにも死んでしまった後に「かわいそうだ」というだけでは済まないという意味で、もつと自制して報道しなくちゃいけないということは常々感じております。感情は一時のものですから、もちろん怒りがなければそういう報道はできないわけですが、その怒りをどういうふうに関後に生かしていくかという非常に冷静な部分を失わずにやっていきたいなというのは同僚とは話し合っております。

あともう一点は、阪神大震災等の影響で、先週ですか、茨城県でもまたいじめが原因と思われる自殺がありました。自殺の遺書があったにもかかわらず大河内君のときと比べると扱っても小さくてということ皆さんはお気づきだと思っただけでも、マスコミは学校と同じで、開かれています。閉じられているある専門家の集団になりつつありまして、それを変えていけるのは皆さん。それは学校と同じだと思うんですね。地域の人だったり、子どもたちだったり、いつも教育というサービスを受けている子どもたちからの声を大切にしなくちゃいけないのと同じように、新聞も、今質問をしていただいた先生のような、そういう意見をどんどんこちらの方に言っしてほしい。対応をこつちもしたいというのは同じですし、なぜそうなのかというのをじかに新聞社やテレビなどにどんどん言っつけてほしいと思います。

それは風通しをよくするという意味では、いろんな問題を解決する一つの基礎だと思えます。いろんな異なる分野の人がいろいろな意見を交わすことをもつとたくさんしなくちゃいけないと思いますので。特に私どものマスコミというところは影響力が大きいだけに、いろいろな人の意見を聞かな

くちやいけないのが基礎ですから、本当にどんどん言ってきたらやっつけていきたいと思っております。以上です。

○菅 ありがとうございます。

私は司会者ですから、発言をしてはいけないんだと思うんですけど、いじめによる死で、余りほかの人が言っていないことを考えています。私はこのところいじめについて発言をさせられたり、文章も書かせられたりした中で考えてきたことで、多分これは大事なことだと思うことが一つあるの  
で、発言させて下さい。シンポジストの皆さんもよろしいですか。

いじめによる自殺には、いろんな原因があるんですけども、その中の一つだけ皆さんに考えていただきたいと思うんです。

これは今の若者の死生観というか、死や生に対する考え方が変わったと私は見えています。それはとっても恐ろしいことで、何とかしなければもつとつとこういうことが起こってくるという危険性を私は感じているんです。

最初、どこでそれを感じたかというと、岡田有希子というアイドルが昔自殺して、後追い自殺があって、「岡田有希子シンドローム」と言われたことがあったんです。これがちょうど私が今行っている大学の授業のなかでも大問題になって、学生がそれについて議論をしました。私の授業はちょっと変わった授業で、戯曲を書いてもらって、最終授業で上演する授業なんです。その議論を受けて学生が岡田有希子の死を戯曲にして書いてきた。レベルとしては相当いい作品です。内容は文句のつけようがないぐらい立派なんだけれども、題がこういう題なんですよ。「ヒロイン・オア・ダイビング・ドリーム」と言うんです。わかりますか。「ヒロイン」というのは岡田有希子のことです。そして彼女や後追い自殺した人たちの死のことを「ダイビング・ドリーム」と言っているんです。何か夢見心地に別

の世界に転生するというか、フワッと軽い死なんですね。

私は、余りいい予感がなくて、若者は「グイピング・ドリーム」なんていうふうには死をとらえるのか。例えば周りの家族の悲しみなんて、視野に全然入ってこないわけですね。そう思っていたら、今度の大河内清輝君（東部中二年・十三歳）の遺書に何て書いてあったかというのと、「僕は、旅立ちます。でも、いつか必ずあえる日がきます。その時には、また、楽しくくらしましょう」と書いてあるんですね。つまり、死というのは何かふっと旅立って、またいつか会えるみたいだね。そういう死生観の変容はどこからきたのかと私も随分考えました。新聞や雑誌を読んでいたら、アメリカのある研究機関がこういう指摘をしているんですよ。

それは、今の子どもたちというのは成人するまでにほとんど親しい人間の死に出会わない。考えてみればそうですね。先ほど和田先生が言っていたらっしやっただけでも、農山村的大家族から今みたいな都市型核家族になるでしょう。そうすると、お父さん、お母さんと兄弟二人でしょう。何十年も誰も死なないじゃないですか。たまに田舎でおじいさんが死んだって、それはウーンと遠い死でしょう。お葬式に行くぐらいでしょう。だから、本当に死の現実、実相というか、みんなが看護したり、死んで、後、遺族が悲しむということを学習する機会がないんです。

ところが、アメリカの研究機関がもう一つ言っているのは、成人するまでにアメリカの子どもが映像の上での死は平均五万回みるといいます。つまり、毎日のニュース映像、テレビドラマの中で次々人が死んで、成人するまでに五万回見る。中には、先週のテレビドラマで死んだ人が、次の週には別のドラマでここにこ笑って出てくるでしょう。と、やっぱり死の実相とかけ離れた死が子どもの中にすり込まれる。何だか軽いものでふっと消えてしまつて、また出てくるかもしれないみたいなの、そういうすり込みが子どもたちにされているんじゃないか。

これは人類に未来にとつてもゆゆしき問題で、死に対してきちっとした学習を家庭の中や、学校教育の中で取り組まなきゃいけない。記事を読んでいたら、アメリカではプラグマティックな国だから、アメリカというのはそういうことはすごいと思うんだけど、例えば子どもが自殺するでしょう。そうすると、その地域のカウンセラーかなんかが親のところに出かけて行って、「ビデオを撮らしてくれ」と言う。親はほろほろ泣きながら「私の息子は死んだ。私たちがこんなに悲しむと知っていたら、あの子は死ななかつたはずよ」というものすごく迫力のあるビデオができると言うんです。そして学校に対して、カウンセラー協会がビデオはうちにありますから、いつでも死の学習のために使ってください」と伝える。アメリカでも子どもの自殺は問題になっているんですね。そうでなきゃそんなことはしないでしょ。

だから、こういう工業や情報産業が発達した国ではさつき和田先生がいろんな点で指摘していたようなことの一つのあらわれとして、不登校もあるし、いじめもあるし、さらにいじめによる自殺、自殺でもいじめによる自殺とばかり限りませんけれども、子どもが簡単に死ぬなんていうことも一種社会の病理現象として出てきている。その根底に死生観の変容があるんじゃないか。これはみんなで考えないといけない時代に来ているんだらうなと思います。

長い話をしまして申しわけないんですが、黙っていられないという気持ちになりましたので、すみません。

ほかに何か質問がありましたでしょうか。どなたかパネラーに質問があつたら質問をしてみてください。

何かパネラーの皆さんの方で言い残したこととか、これを言いたいということがあつたらどうぞ。  
○永田 さっき出した質問以外にもたくさんあるんだと思います。かかわり方とか、子どもの気持ちと  
いうことで、そこからどういうやりとりをするかということ、一つ本を紹介しておきます。立川孝  
つて元東京都の先生で、やめられました。憤然としてやめられた先生です。「不登校児からの手紙」(日

本評論社)、昨年出まして、かなり好評なんです。ご本人のコメントは少ないんです。さっき言った、いろんな不登校の子たちがいて、その子と、この立川先生とのやりとりというか、先生に対して子どもたちから出してきたメッセージが、まさにいろんな形であります。これがさっき言った、かわり方とかどうとかということの大変参考になると思いますので、ちょっとご紹介しておきます。

菅先生のも紹介したいんですけども、さっきやってしまったから。

○菅 それでは、時間もちょうどいいところに来ましたので、ぜひ一言言っておきたいという方があれば、一人かお二人あれますけれども、いかがですか、特にありませんか。

では、長い間ご苦労さまでした。ありがとうございます。シンポジストの皆さんもありがとうございます。(拍手)

## 閉会の言葉

○司会 シンポジウムの中に雨が降ってまいりました。傘をお持ちでない方はちよっとお困りかもしれません。

きょう参加いただいた方は一七三名という報告を受けております。いままでの不登校のシンポジウムとは違い、「学校の新しいあり方をさぐる」というサブテーマでしたので、若干不満に思われている方もあろうかと思えます。その点はこちらが願っていたと思います。

これまで、報道関係の方と、学校の先生が集まって論じる機会はなかなか無かったと思います。先





ほども宮島さんに会場の方から質問がありましたけれども、そういった声になるべく学校の先生に、新聞社の記者の方に、また、今日は「はじめ塾」の和田さんもいらっしやいましたけれども、そういう方々に届くことが、これから教育問題を考えていく上ですごく重要なのではないのでしょうか。そういう橋渡しを、これからも教育文化研究所でしていきたいと思っております。

それから、教育相談を教育文化研究所でやっております。後ろの方にそのチラシを用意しました。教育に関する相談は月曜日から金曜日までの午前十時から午後二時の間、行っておりますので、ご利用いただければと思います。

今日は、論じる機会が少なかつたかなと思って、心苦しく思います。

ご参加いただき、どうもありがとうございます。(拍手)

これでシンポジウムを終わります。

参
加
者
感
想
文

☒ 大変参考になるお話をありがとうございました。

教師をしておりますが、幸い（幸いか？）今年度は不登校児のいない元気一杯なクラスを持っています。永田先生に取り上げていただいて、一人一人の素晴らしい点を認めていくために「もう一つ歩みよりを」とありました。その点で、宮島さんにいらしていただいていたので、マスコミでも取り上げていただけるといいなと思いました。ありがとうございました。

☒ 小島先生、永田先生のお話大変面白く聞かせていただきました。

私は現在三四人の担任をしています。A君という目立たない学力も低い子がいます。その子があつる日プリントを忘れた時に、私はそれを学校が終わったあと取りに行かせました。その子はお父さんとお母さんに車にのせてもらい、プリントを届けにきました。私は職員室で受け取った後、「テスト勉強がんばってね」と彼に言いました。その時は特別な気持ちはありませんでした。後日、その子のお母さんと会う機会が偶然会った時、そのプリントを届けた時の話になって、お母さんが私にこう言いました。「先生、うちの子がもどってきた時、先生がテストがんばってねって言ってくださいました。僕だけのために言ってくれた。」って興奮して車にもどってきたんですよ」。中二の男の子です。私の何気ない一言、お母さんに言われなければ忘れていた一言でした。もっともっと一人一人に心からの言葉をおくろう。その日から決めました。

☒ どの先生の話も具体的にわかりやすかったです。

ロールプレイをしながら、子にそのような実践を私もやってみようかなという気持ちになりました。

た。

☒ 不登校の児童がいる学級のあり方——このことを考えながらシンポジウムに参加させていただきました。というよりも、不登校の児童に対する担任のあり方を考えながら参加させていただきまし。ルールプレイのお話をきいて、子どもを理解しようという姿勢に欠けていた自分を発見しました。と同時に、あせらずに、ゆっくりと、理解しようとするのが、というよりも愛情をそそぐのが大切なんではないかなと思いました。(これは、永田先生のお話から)

幸い不登校の子どものお母さんがとてもいい方なので、なるべく家庭訪問をしておしゃべりをしてみようかなと思っています。今日は、ありがとうございます。

☒ このようなシンポジウムに初めて参加しましたが、いろいろな立場からの話を伺うことができよかったです。

現実に不登校の子と接している毎日をふり返り、自分をふり返るよい機会となりました。きばらず、欲張らず、落ちこまないで、子どもと親と、またまわりの人たちと接していきたいと思えます。☒ 私は一人の母親です。自分の子どもが、日常あたり前のこととして学校へ行っていることを、それでいいと思っています。学校へ行くことで、どうなってほしい、どんなふうにするかしてほしいという思い入れ(親として)は、今、ずいぶん自分の中で少なくなってきたいて、だから、楽に子どもものことも見ていられるのかもしれない。

☒ 大変になりました。不登校児童に対して、結果を早く出したいという気持ちは今まで強かったのですが、長い目で考えていく必要があると思えました。その子にとって何が大切なのか、よく考えて接していきたいと思えます。

☒ 最近学校が忙しいと感じます。私が教員になったとき、子どもたちとの触れ合う時間が自由にと

れたと思います。そんなことが特に感じられます。今の学校事情は、子どもたちの話し合い（雑談）の時間を設けるのはなかなかたいへんです。

また私は、子どもが必ずしも学校へ常に来る必要はないと思います。われわれ大人にも有休があるように、子どもたちにもそのような制度があってもよいのではないかと思います。

☒ 学校の制服（公立中学校では標準服というこそくな言葉を使うが）は、絶対イヤといって自分の好きな服装で月に一度ほど保健室にくるA子さん。彼女はこの学校の生徒はキライという。ちょっと前までは何もいわずに閉じこもっていました。

今保健室を訪れるBさんは、「学校はイヤではないんだけど教室がね。でもお父さんもお母さんも保健室なんて変な人が集まる所だし、授業もわからなくなるし、友達もどんどん減っていくっていうんだよね」と泣く。彼女は家にもなかなか帰りがらない。

A子もB子もその他沢山来室する生徒たちは、とても感性豊かで、今自分の生き方を一生けん命探っている。

自由な服装で、自由な発想で生きられる学校であるとよいですね。

☒ 不登校児がいたら、おやつをもって山のほりでもしながら、自然の中で話しながら（学習以外のこと）過ごすと、症状の様子がわかるし、対処方法もみつかるといふ話に同感します。

知識を身につけることと楽しくやること（ただ楽しいのではなく、苦しさもあるけれど、ああやったというような実感のある楽しさ）どちらに重点を置いて、日常の指導をしているかで、学校のあり方が変わってくると思います。子どもたち自身は、二〇年or三〇年前と変わっているのに、指導法はほとんど変わっていません。変えることに不安（高校入試につながるのかもしれない）がor変えたくない、変えてはいけない空気があるのです。親たちにしても、塾に通わせたり、習いこ

とをさせたり(子どもの意志に関係なく)するのがよいと考えていることもあります。不登校児(むかし受け持っていた子)に電話して、「次の休日ハイキングに出かけよう。友達を誘っておいで」と話したら、次の日は登校したそうです。何か一つでも、その子の気を引き立てるようなものがあるなら、不登校はなくなるのではないのでしょうか。

学校——一日に二日は休んでもいいと思います。今は、第四土曜日など親が休日のため、子どもたちが休みをとって一緒に出かける時代です。(私の経験です。)

名前は伏せますが、転入生で不登校がちな子どもがいました。兄弟三人で、その子がいちばんおとなしいため、母親を二人の兄弟が話相手として独占してしまうのが原因で、彼がさびしいのではないかと思いました。朝、時々母親からぐずってる旨の電話があり、本人と電話で話し、それによって登校することもありました。四日休みが続いて、校長が心配して、家庭訪問してくださって「明日から登校するだろう。担任は行かなくてもよい。」と言われました。しかし、私の予想した通り、次の日は来ませんでした。それでその夕方家庭訪問し、三時間の間、子どもと外で月を見ながら話したり、母親と話したりしました。父親は八時過ぎても帰宅しませんでした。母親に父親が彼と話すことを願いました。次の日から彼は毎日登校しました。

☒ 不登校の子(当時小学校三年生)と一年弱つきあいました。私は私の理論を通し、「あなたの考えや行動を改めなさい。」と接してしまつた場面が多かつたです。でも本人が自分の姿が自覚できて来るにつれ、今まで避けて通ろうとしてきたこと(教科学習・友達との遊び・持ち物のしたくなどいろいろ)に自分からやってみようとする姿が見られました。それとあわせ、本人の表情がおだやかで明るくなりました。それまでは本当に生氣なく、ピリピリとしていました。私は待てない教師でしたが、その子が不登校というサインを出さなければ安心して生きられない所に追い詰められてい

たという状況は理解していたつもりでした。

今日、永田先生より子どもと「つきあう」ということばが出ましたが、学校が「人と人のつきあう場所」になりえるには、教師のかまえてどう変わるかにかかっていると思います。また、日本の学校のあり方を見直す時期にきていますし、それを立ち止まって考えるよい機会となりました。なかなかうかがえないマスコミの方のお話をうかがえたのが有意義でした。

☒ 「おなか痛いから休みます」と連絡をもらうとドキッとします。イヤだなと思うことがあったり、友達と、また先生と、おうちのひととのコミュニケーションがうまくいかなかった時、小さな子は本当におなか痛くなってしまうと気付きました。実際自分でも大人でも気分がのらないことは気がすすまず、ということはあるのですよね。不登校という子どもを担任したことがまだないのですが、日々、一人ひとりの子がいろいろな悩みをかかえていることは違いありません。一人ひとりの個を生かして伸ばしお手伝いをお願いしつつ、むずかしさも感じるこのごろです。

今日は、いろいろな立場からのご意見をきけ、新たな気持ちになりました。ありがとうございます。

☒ 今、不登校の子どもを受け持ち、少しずつ登校できるようになってきました。そこに至までには、いろいろな機関、親御さん、いろいろな先生方と関わりを持ってきてのことです。だが、まだまだ一日の中での一部分でのこと、かなりそれに対する精神的な負担（なかなか他には言えませんが……）は大きいです。自分自身が立ち上がれなくなることにすらありました。のりきりましたが、でもそういったお子さんと出会い、教育の根本にあるものは、共感できる。ことだなということを感じています。

今日の先生方のお話は、こうしなさい、ああしなさいという指示めいたものではなく、どの方も

(理屈めいたものでなく)不登校のお子さんと実際に接し、共感し、(うまく言えないのですが……)その子と抵抗なく接していく、共に成長していくことが大事である、共に学びながら方向性を見いだしてあげる……何かすごく共感できるものが多かったです。自分の実践もそうです。もっともつと息苦しいものかと思いましたが……。職場などでは比較的私はオープンな方なので、児童指導・校長・学年・友人等に相談します(自分の精神的な面を安定させるため)。でも、持たれたことのない方(いつも持たなくてもすむような方)は、持たなくてよかったとか、安易に学校が楽しけりゃくるわよ……なんて言います。教師の中でもかなり視野のせまい方も多いです。ですから、自分などはまだいいと思いますが、教師のケアも必要だと思います。担任として任された人だけに、負担が過度になりやすいです。私は、学校に来れる来れないということではなく、(学級の子どもたちはさり気ない関わりができています。宮島さんのような感じかな……と思いました。)今その子に必要なら、これから必要な、生活力を(きっかけを)つけてあげたいと思っています。自分がオープンにいろいろな人と関わっていく、その子と共に関わっていく、自然な形ですつとつきあっていきたいと思えます。(その子に忘れられても……)

うまく書けなくてすみません。参加して本当によかったです。ありがとうございました。

☒ 「子どもの感じ方が鈍くなっている」というお話ですが、「感じ」をどう処理しているのか分らないというのではないかと思えます。永田・小島両先生が細かいことから子どもに沿って……といわれていますが、細かいことから処理のしかた(体験でしようか)を増やすことが必要なのではないかと思えます。「感じ」はむしろとぎすまされたように敏感なのではないでしょうか?そして、では大人たちはどうか、大人たちも同じです。いろいろ「感じ」ていながら、大人のいわゆる常識として、(社会の学校化?)無視していく(感じを殺していく)、その状況を少なくしていく方向に

動いていかなければ……。でも、子どもが変われば、大人も変わると思うので、やっぱり学校のやることはあると思う。

☒ 菅先生の「若者の死生観が変わってきた」話を興味深く聞きました。時代とともにいろいろなものが変わってきましたが、その流れを的確にとらえることの重要さを痛感しています。変えていかなければならないものもありますが、変えてはいけない、守り続けていかなければいけないものもあるはずです。学校も月二回の週休二日制となっていく中で、新しいあり方も模索する必要があります。学校が地域が家庭が真剣になつて考えていけば、道はなんとか開けそうですね。いい機会を与えていただいたことに感謝します。

☒ 小島先生の「子どもにそうごと」「勉強はおもしろくなきゃダメだ」ということばに、自分の教師生活を改めてふり返ることができました。

永田先生のいう「ぬくもりの必要性」を深く感じます。子どもと今のありのままの自分で接してゆきたいと思います。

☒ シンポジストのキャラクターが様々で、広がりのあるシンポジウムで有意義であった。

☒ 教文研発行のパートII、パートIIIを読んでから、この会に初めて直接会場に足を運んでみました。特に和田先生と永田先生のお話はよくわかりました。また、小島先生や宮島さんのお話の中にも、いくつか参考になる点がありました。

今までの学校教育が抱えている課題と、そこから派生してきた不登校の問題から、学校が大切にしていかなければならない事について、もう一步先を見た話し合いができるとうかっと思えます。つまり、今後の学校教育のあり方(姿)が具体的に見えるような話し合いができたなら更に良かったのではないかと思います。



教文研の主催事業として、不登校の問題だけでなく、五日制についての課題、子どもの人権についての問題等、学校として考えなければならぬ、また取り組みなければならぬ問題はもつとたくさんあると思います。ぜひ実りのある話し合いがこれからたくさんできる場があると良いと思います。今後の取り組みに期待しています。

☒ 学校の新しいあり方をさぐる——という副題にひかれて来ました。

はじめ塾の和田先生とコーディネーターの菅先生の話は、ちょっと昔によく言われたことのように感じました。「今時の子ども」をそのまま全部受けとめるところから、新しい学校や社会のあり方を考えるのが自然と思います。

永田先生が言われたように「今の子は……」と恐れも知らず言うおとなの傲慢さは、いただけないなと思いました。

「教師ふせいに不登校の子どもの苦しみがわかるか……」

☒ さらに続けて取り上げてもらいたいテーマだと思います。

☒ 今後のテーマも「学校のあり方をさぐる」を継続してはどうでしょうか。

今までは、こういう関わりをすればとか、こういう育て方が今の子どもこういう体質（性格・弱点）を育てたという視点での話が多かったと思いますが、原因探しや、責任者探しの時代ではない。今の子ども達のありのまま、また大人のありのままをそのままとらえ、どうしたらやわらかい（やさしい）関係の中で楽しく生活ができるかという視点でのすすめ方がポイントになると思う。

☒ 和田先生の話がとてもよかった。菅先生の話も聞きたかった。今度は菅先生の講演をお願いします。

☒ ささまざまな分野の方をシンポジストとして設けたのはおもしろかった。

サブテーマは、「学校の新しいあり方をさぐる」だが、その点より個としてのあり方に重点がおかれてしまった気がする。不登校児童・生徒に対する学校・地域などの組織的取り組みをもっと深めていきたかった。

☒ 今回のシンポは副題がうまく生かされなかったような気がします。永田先生の問題提起「教師と教師、教師と親にどうやって近よっていくのか」を話し合えればと思います。

菅龍一先生や永田實先生のお話（講演会など）をうかがいたいと思いました。企画できましたらお願いします。

## まとめにかえて

一九九二年二月、相模原教育会館で開かれた「不登校をめぐる」part1を皮切りに、同年十月の平塚教育会館でのpart2、一九九四年二月のエポックなからはら（川崎）でのpart3、そして今回の小田原市民会館でのpart4と三年間、県内各地でシンポジウムを開いてきた。この間、私はシンポジストとして一回、コーディネーターを二回勤めさせていただいた。不登校をめぐるシリーズは、恐らくこれで終了ということになるだろうから、私にとっても感慨深いものがある。

今回は「はじめ塾代表」の和田さん、神奈川新聞社記者の宮島さんという異色で新鮮なシンポジストをお迎えして特徴が出せたと思っている。和田さんは寄宿塾という形で子どもとかわる中で、現代の子どもの歪が見え、それを正そうとしておられる。幼児期の生活体験の空洞化、子どもを取りまく個室化、個食化などは考えさせられる指摘である。基礎体力と精神力の低下、感性の鈍磨などもそ

の通りであると思うのだが、それらをどうして回復させるか、家庭や学校のこれからの重い課題である。

宮島さんは中学三年のとき出会った友人の話に説得力があった。それぞれの個性や感性を尊重しながらつき合うというのは、不登校だけではなく人間関係の基本ではなからうか。川崎市多摩区の中学の先生の「漫画部屋」の話も興味深いものだった。学校を制度の上で改革することよりも、教師自身の変革が必要であるということかも知れない。

この視点を強烈に印象づけて下さったのが小島さんである。十年前、現任校に來られたとき出会った乱暴な小学四年生が、小島さんの教師としての生き方を変える。一緒に釣りに行ったり風呂に入ったり、父母や祖父母に会ったり。この子どもは今までは免許を取り釣り舟の船長になっている。こうした子どもの生活力を今の学校では評価できないのではないか。一般に彼らの居場所が学校の内外に存在しないことが、不登校やいじめや非行の原因になっているのではなからうか。

この生徒との出会いを機に、教師集団の変革が始まる。その中でロールプレイの果たした役割は大きい。ロールプレイについてはフロアに充分伝わったかどうか不安は残るが、これは演劇の持っている魔力のようなもので文章では仲々伝えにくい。体験してみるしかない世界である。他者を演ずることによって起こるさまざまな感情、相手との交流、思わず出てくるセリフや身体的行動。それらを互いに観察することによって自分が対象化される。そうした世界が存在することが判っていただけならと思う。小島さんの結論は子どもに寄りそうことであるという。

永田さんはシンポジストとして三度目の登場である。今回は不登校の学級で初期に出会った生徒に「教師風情に、登校拒否の苦しみが判ってたまるか」と言われたことを肝に命じたという話から始まった。山本有三の「海彦、山彦」の話は、不登校児だけではなく、現代の屈曲した子どもたちの心理

を示している。自己防衛的な最初の発言が時間の経過とともに変わっていき、本音が出てくる。一般に教師は子どもの最初の反応だけで判断し、本音が出るところまでつき合っていないのではなからうか。これも子どもに寄りそうことの大切さを示している。

今回、フロアからの質問はやや低調だった。土地柄もあるかも知れないが、むしろ不登校そのものが社会的に認知されてきた証拠ではなからうか。辛いのをがまんして行くくらいなら学校を休む方が良いという考えが一般的になってきている。フロアからいじめに対する質問が出たことも、教育界のテーマが不登校からいじめに変わりつつあることを示していたと思う。

一九九五年五月一日

菅 龍一

第七回教文研教育シンポジウム記録

**不登校をめぐって Part4**

—学校の新しいあり方をさぐる—

1995年7月10日

発行：神奈川県教育文化研究所  
横浜市西区藤棚町2-197  
神奈川県教育会館内  
☎ 045-241-3531

印刷：(有)神奈川教育企画  
☎ 045-253-3435

**KYOBUNKEN**